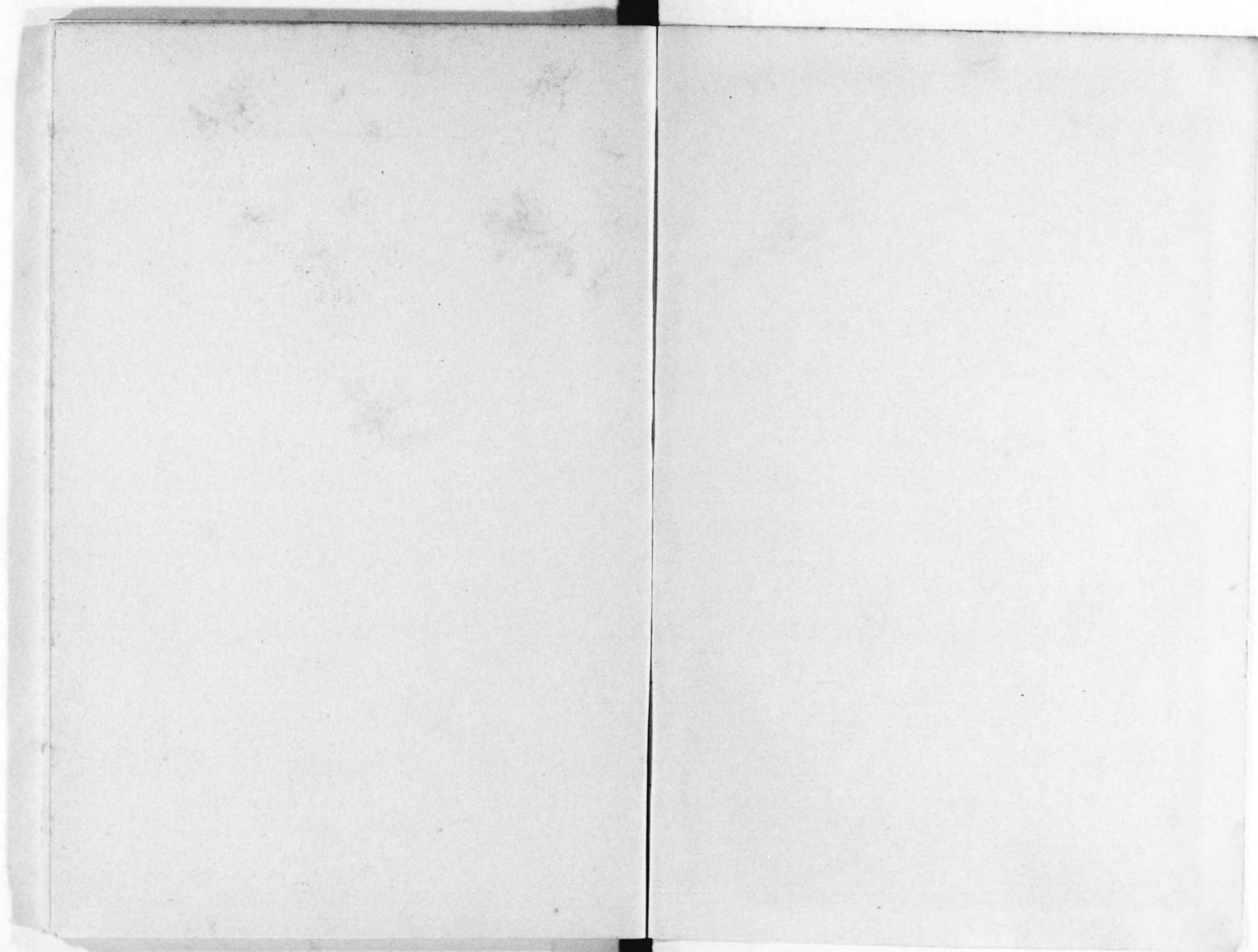


始





—

に

い

芽

特232
140



京 東
版 房 書 山 篠



目次

に
い
芽

神 在 り	二七
不思議な助け方	二八
試 験	三〇
自分免許	三二
自分を見るときは	三三
神	三三
眼	三四
今日限り	三四
私の今年	三五
貰ふこと、上げること	三六

仕 事……………三六

最も大切な事……………三七

損をしない私……………三七

好かれる私……………三七

なんにもしない時……………三六

奪ふ人々、與へる人々……………三六

人との交り……………三九

迷 び……………三〇

生活の妙味……………三〇

自分の姿……………三二

徳はどこから……………三一

ありのまま……………三三

他人の喜び……………三三

気分よくなる道……………三三

心持の値うち……………三三

一 線……………三六

二通りの越え方……………三七

どちらが難しい？……………三九

行く方が易い……………四〇

道が云ふ……………四一

どちらからでも……………四一

金が要ると思ふ時……………四二

物 心 一 如……………四三

他を救ふ道……………四三

賭博に耽る人……………四四

打ち開ける徳……………四五

物のよさ……………四五

自分を上げる事……………四六

仕事をする時の心掛	四六
仕事のある所へ	四七
無一物、赤裸々	四八
不平不足の根が掘り返される	四九
忘れてならない事	五〇
事はなくならず	五一
何を目ざして	五一
メグリの塊	五二
知らぬ間に	五三
皆忘れて	五三
云はずに居られぬ事	五七
金が何故欲しいか	五七
わが子に	五九
道に依る仕事の仕振り	六〇

子よりも親を	六三
同じ道行き	六四
神佛のいろく	六五
なんとなしに	六六
責任	六六
吾家に居る人々よ	六七
一つの生きたもの	六八
自分のン	六八
一 新	六九
やりぬくばかり	六九
教は	七〇
教がわかると云ふ事は	七〇
光	七一
自分が自身のものでない	七三

祈	リ	七三
暗	示	七三
話		七四
心持は浮ぶ		七四
境	地	七五
三つの心掛		七五
お詫びの道		八〇
絶対絶命の一道		八一
無常、無我		八三
そのものが		八五
お詫びの形と心		八五
人生の秘密		八七
不思議な救ひ		八八
手許の自覺から		八九

濟まぬと云ふ心持	八九	
一重の隔て	九〇	
生きたもの	九一	
心のあと	九二	
よく私は云ふ	九二	
生命の喜び	九三	
只	一 つ	九三
天地の喜び	九四	
どこかに	九四	
誰れのものでもない	九五	
酒	九六	
あなた全體を	九七	
絶望の中から	九八	
皆	一 つ	九八

極樂は地獄の真中に.....	九九
話は生きたもの.....	九九
手許へ力な.....	一〇一
自分の云ふ事、書く事.....	一〇一
さうさせるもの.....	一〇三
育て、行くもの.....	一〇四
夫婦の間.....	一〇四
子を育てる上に.....	一〇五
犠 牲.....	一〇六
特 別.....	一〇七
拜む心こそ.....	一〇八
「我が砕けて.....	一〇九
空 つ ほ.....	一一〇
同 じ 事.....	一一一

ほつりく.....	一一一
待 た う.....	一一二
天地を通して.....	一一三
夫れ何ぞ.....	一一三
生死の間に不二を.....	一一四
間の抜けたるが.....	一一四
登らざる六甲.....	一一六
生命の調子.....	一一六
生 命 は.....	一一七
私 の 歌.....	一一八
母 よ.....	一一八
よ い 母.....	一一九
正 直.....	一二〇

お父さんは……………三三
云ふて見るがよい……………三三

自 畫 像……………三三

に ひ 芽

神 在 り

神を見度いと思ふ人は私を見て下さいとよく私は云ふ事がある。それは私の一舉一動がそのまゝ神の現れだと云ふ意味では固よりない。私のやうなどの點から云つても救はれる見込のないものを、このやうに仕合せに生きさせて下されて居ると云ふのが、神の御働きでなくてどうして出来よう。神より他に私のやうなものをこんなにして生きさせて下さるものがあらう筈がなく、神が無くして私がこんなであり得よう筈がないと云ふ意味なのである。私の神は天地の創造者と云ふのでもなく、世界最後の審判者と云ふのでもなく、人類全體の愛護者と云ふのでもなく、存在の究竟相と云ふのでもなく、只私自身をしてかくあらしめて下されて居るお恵みの力なのである。だから私のあらむ限り、私には神の存在は疑ふ事が出来ないのであつて、そ

これは私そのものと共に明らかなる事實なのである。そこに私の一切の仕合せ、一切の働き、一切の氣持の根據がある。

不思議な助け方

信心はだん／＼に修養してそこに至ると云ふやうなものではないらしい。例へば腹を立てまいとする事にしても、腹を立てまいと思へば思ふ程、腹の立つて仕方のない自分である事が分つて来る。始めはさほど氣のつかなかつた小さな腹立ち、微かな腹立ちまでも眼に見えて来るやうになり、而もそれがどうする事も出来ないし、つこいものである事がわかる。又自分の力で腹を立てまいと思つて居る力位ではどうともならない程、腹の立つて来る力が強い事がある。腹を立てて来る力はどこからどのやうにして起つて来るやらわからないものである。とても自分の覺悟や心掛け位の事で、あらゆる場合に腹を立てまいと云ふ事は出来得ない事である。心配にしても憎みにしても疑にしても、その他のいろ／＼の困つた心持、悪い心持にしても、

皆その通りである。

そして腹を立てまいと心掛ければ心掛ける程、腹の立つて仕方のない自分である事がわかり、而もそれがどうする事も出来ないものである事が知れて来る所から、私のやうなものは、とても助かる事の出来ないものであると云ふ事が、自分にわかつて来る。そこから自分と云ふものを投げ出さざるを得なくなる。これ迄の一切の自惚が碎けて了う。自分でどうする事も出来得ない私であると云ふ事が得心出来る。それは實につらい事であるが、逃れられない成行きになる。

そこから局面が一新する。そのやうな自分、自分の力でどうする事も出来得ない自分、悪い事、困つた事しかなし得ない自分が、かうして兎も角もこの世に居らせて貰はれるのはどうした事かと、全くそれ迄とは新しい考へ方で、自身を見直さざるを得ない事になる。そこから絶對無限の御恵みの力が氣がつく。私のやうなものをこんなにして下されて居るとは、これは何んとした難有い御恵みであらうかと云ふ事になる。そこで一切に對する見方考へ方が一變し一新し、底から／＼感謝の一念が催して来て、腹の立つ事も憎む事も疑ふ事も心配する事も、自

然になくなつて了ふ事になる。

不思議なお仕組みであると云はなければならぬ。

試 験

「女があなたの話を聴きに來たり、煩悶を訴へて來たりする心持の中には、只道を求めてと云ふだけでなく、異性としての情も可成りそこに働いて居る事を感じませんか。」

ある教授が初對面の折、さう云つて私に尋ねられた。

「それは随分あるかも知れませんが。私自身男に會ふのと女に會ふのとは、心持が異ふ事を感じます。異性としての情が多分に働いて居る事を感じます。それで私の友人の中には、こんなにして講演などして歩いて居る私を危ながつて、どうだくと注意して呉れる向もあるのです。」

さう私は答へた。そしてその事に就て考へて見て居る。それであるのに、今日まで割合に私

が無難に通つて來て居るのは、一つは私に臆病なところがあるからでもあらうし、私の性質のどこかに情に溶け込まない所があるからでもあらうかと思ふが、一つには私に男女の情の中に潜む甘さと共に辛さの見える眼が開いて居るからではあるまいかと思ふのである。自分免許でそんな事を只勝手に定めて居つても仕方がない事であるが、私にそんなよい眼が開いて居るかどうかと云ふ事は、誰れかと試験でもして呉れなければ、なんとも分らない事であつて、それ迄は只獨り定めに定めて置くより仕方がない事であるから、その教授がそんなに尋ねて呉れたのを機會に、私獨りでかう定めて置いて見ようと思ふ。そしてこれから後、その點で私を試験して呉れる人が出て來て呉れるか、何かの事實に出會はして、その證明が出来るのを待つて見ようと思ふ。

自 分 免 許

その教授は又こんな事をも云はれた。

「信心に醒めるまでの事や、その時の工合は割合によく語られもし、書かれもして居るやうだが、信後の消息は古今東西あまり語られて居ないやうに思はれる。寧ろ大切なのはそこにあるのだが……」

私もそれに同感の意を表した。そして心算かに私はそれを割合にやつて居る積りなのだがと心の中で云うて居た。これも自分免許では仕方のない事で、何かの試験を経なければならぬ事なのである。この點に於ても私はそれを待たなければならぬ。

自分を見るとは

「自分を見るとはどうする事ですか」

と尋ねられた人がある。所がちやうどそこに「二十年の間、佛の慈悲を分り度いと思つて、求めく／＼て來ましたが、どうしても分りませず、この頃では仕事も手につかず、夜も眠れぬ程に苦しんで居りましたところ、昨夜から、自分を見よとのお話を承りまして、これまでは全く

見當が違つて居つた事にやつと気がつきました。自分が見えますれば、佛の慈悲はそこにあつたのです。難有う御座いました。佛様から何かよいものを貰ふ事だとばかり思つて居りましたが、何も貰ふ事では無うて、私の持つて居つたものが皆無くなつて了ふ事でありました」と云つて喜ばれる五十餘りの婦人が居られた。それでもその青年には自分を見るとはどうする事であるのか、わからないらしかつた。私もどうして上げる事も出来なかつた。

神

「自分と云ふものが見えて來たところから、それをこんなにあらしめて下されてある所のお力に氣がついて、それが神だとわかつたのでなければ、神々と云つても概念の神、空疎な神であつて、眞に生きた神がわかりもせず、生きた信念に生きられもしない」と云つた人がある。私も全く同感である。

眼

「信心は力仕事ではありません。幾ら根氣よく坐つて見たとて、夜通し唱へ事をして見たとて、讀んだとて、聞いたとて、考へたとて、行つた^{おこな}とて、そんな事だけでどうともなる事ではありません。人生を見る眼、自分自身を見る眼があかない事には、どうともなるものではありません」

と云つた人がある。これにも私は同感の意を表した。

今日限り

又こんな事を云つた人もある。

「自分が妻子を愛して居ると思ひ、自分が愛してやつて居ればこそ、彼等は立行くのだと思

ひ、それだのに彼等はそれを難有いと思はない。却つて自分に對して不平すら抱いて居るらしいのは不都合極まると思つて居りましたが、そんな事を思ふ私の思ひ全體が、妻子を少しも愛して居るのでなく、只自身の得手勝手な慾であつたのだと云ふ事がやつと今分りました。私がそんな慾心で彼等に對して居つたのですから、彼等が感謝しないで、不平ばかり抱いて居た筈なのです。少しも不足の云へた私ではありません。間違ひは全然私の方にあつたのです。この上は只私の方から出来る限りの愛を彼等に注ぐ事に努めて行き、そこに私の喜びも仕合せも味うて行く事にしさへすればよろしいのです。いや、もう今日限り私の家庭に波風は立ちません。今日迄の波風は私が立たせて居たのです。」

私の今年

昭和六年の新年を迎へて私は今年もよいに相違ないと云ふ氣がした。何故かと考へ直して見て、それは私が悪くなる筈のない道を歩ませられる事になつて居るからだと云ふ事がわかつ

た。

貰ふこと、上げること

貰ふ事も素直に出来、上げる事も素直に出来たら、物の扱ひに困る事は無くなるが、それは自分が自身だけのものでなく、みんなのものであると云ふ事がわかつて、始めて出来る事である。

仕事

仕事は一切のよき物を産む母であるが、同時にそれは又自分の氣持を整へて呉れ、生命の調子を合はせて呉れる事に依つて、私自身を助けて呉れるものである。

最も大切な事

自分と云ふものがよい事を爲し得るものである事がわかり、それをして行く時に、自身が助かつて行くものである事がわかる事程、大切な事はこの世にない氣がする。

損をしない私

私はどんな場合に臨んでも、どんな事に出會つても、もう決して損と云ふ事はしない。どんな時にでも得をする道をわからせて貰つたから。

好かれる私

私はだんくみんなに好かれる。私がみんなを悪く思はないから。

なんにもしない時

なんにもしないで居る時間を持て餘しもせず、退屈もせず、いらくししないで過す事が出来るやうになれると仕合せである。驛に出て汽車が来るまでの時間や、人を待ち合わせる時間、夜中に眼がさめて眠られない時間、病氣して何も出来ない時間、さては集會の席などに出てみんな賑やかに談笑して居るのに、自分一人誰れからも相手にせられないで捨てられて居る時の時間など。

奪ふ人々、與へる人々

おまへが好きだ、おまへを信ずる、おまへを崇拜する、おまへに従ふ、おまへを助けるなど

と云ふ人々からは、きつと何ものかを奪ひ取られるものである。幾ら奪ひ取られても構はない用意が出来て居ないと、さう云ふ人々と末永く付き合ひ通す事はむづかしい。

それに反して、おまへは嫌ひだ、おまへは怪しからぬ、おまへは駄目な人間だ、おまへは許せない、おまへを憎む、と云うて呉れる人々は、きつと何物かを與へて呉れる。さう云ふ人々に對して、こちらからは背かず、離れないやうにして行くと、きつと得る所が大きい。

人との交り

好きな人との交りには^{おとしおな}陥穿や地雷火が多く、嫌ひな人との交りには鐵條網が張られて居る。

好きでもなく嫌ひでもない人とは交つても、何の効も無い事が多い。

人との交りはむづかしいが、むづかしいと思ふやうでは皆いけなくなる。これも矢張り名人の域に達しないと、ものにはならないらしい。

迷　　ひ

餘つた金、餘つた時間、餘つた力をどんな事に使ふかと云ふ事で自分のねうちがわかる氣がする。いろ／＼と迷ひ心の起るのは多くその時である。

生活の妙味

自分に利害の關係の深い事には熱心になり易いが、又同時に囚はれ易く、利害關係の無い事には囚はれる事も少いが、同時に冷淡になり易い。そこでいつ迄も生活の妙味を味ふ事がむづかしい。

自　分　の　姿

自分の姿が細かに見えて居れば、他の人に映る自分のどの姿を見ても、あんな姿は私には無いと思ふ事がなくて済むであらう。

徳はどこから

あれはあの人の徳の力だと云つたり、あれはあの人の人格の力だと云つたりして、それで済ませて了ひ、その徳はその人のどんな心の働きから出来たものであるか、その人格の品位はその人のどんな行から出て来て居るものであるかと云ふ事を知らうとしないのは損な事である。それを細かに知る事が出来た時に、その人を知る事が出来たのであつて、そこで豫て知つて居る自分の心の働きやうを、その人の心の働きやうのどの邊かに結びつける事も出来、そこ

からその人の徳や人格の力が自分の方へ流れ込んで来て、自分を育て、呉れる事になるであらう。

ありのまゝ

人間のありのまゝの姿を現はしたものと云ふものは、それがどの程度のものであらうとも、惹きつける力を持つて居るものである。どんなに飾られ、こしらへ事された形の中からも、その人のありのまゝの姿を見る事が出来るやうになれば、誰れに交つても得をするばかりである。

他人の喜び

他の人の喜びを心から喜ぶ事は、自分に何んの不満もなくなつて居なくては出来難い事のや

うである。

氣分よくなる道

自分のありのまゝをいつでも打開けて話しもし、書きもし、又行ひにも現はす事が出来るやうになれば、心の中に滞るものがなくなり、腐敗する事もなくなるから、いつでもすがすがしい心持で暮す事が出来る。くさくさして居る時に、仕事に精出してやつて居ると、氣分がすつとすると云ふのも、仕事の上に自分の中身が流れ出て行くものだから、自然に整うて来て、氣持がよくなるのであるらしい。

心持の値うち

自分の心に浮んで来るいろいろの心持の中で、その場限りの値うちしかないものと、大分廣

い範圍、久しい間に亘つて通用する値うちのあるものと、中には又いつまでも限られない永い間、どこまでも限られない廣い範圍に貫き徹してその値うちを現はして行くものがあるやうである。それをよく見定めて、それ／＼の價値を附與し、それ相當の取扱をして行くやうにし度い。それが自分の心持に就て出来る、他の人の心持に就ても出来るやうになるもので、さうして育て、行くべきものを育て、伸ばして行く値うちのあるものを伸ばして行き、その場限りで終らせて了ふべきものは、又さうさせて行くのが教育と云ふ事なのであらう。

例へば腹が減つた時、何か食べ度いと思ふ心持、寒い時に寒いから暖かになり度いと思ふ心持、そんな心持は身體を維持して行く爲めには大切な心持であつて、それが無かつたら身體を維持する事は出来ないのであるが、併しそんな心持はそれだけの働きしかないので、自分の生活の中に起るいろ／＼の心持を整理して行くとか、統一して行くとか云ふ働のあるものではない。

所がある人が大患で外科の手術を受けた時、正に手術の最中にふと氣がついた時に思つたと云ふのであるが、多くの醫師や看護婦が一心に自分を助けようとして働いて呉れて居るのを

見、又身内の者や友人が一生懸命に全快を祈つて呉れて居る事を思つて、ふとこれは自分の身體は自分のものではなかつたのだと思つたと云ふ事であるが、さう云ふ心持は、それが生き生きと活動する事になると、その人の生活の中に會てあつたいろ／＼の迷ひや惱みを、凡て溶かして了ふ力を持つて居るものなのである。

自分が自分のものでないと云ふ事が明らかになるなら、傍の者が自分の思ふやうにして呉れないからと云つて、いら／＼する事もあるまいし、萬一死ぬやうな事があつても、さう悶え苦しむ事もないであらう。偽りや飾りの心の無駄な事であつたと云ふ事になるであらうし、心配したり案じたりして居た事も、何をつまらない事をして居たものであらうと云ふ事になるであらう。

同じ自分の心の中に起つて來る心持ではあるが、その働きの至つては、大小強弱深淺廣狹、計り知るべからざるものがあるではないか。

一 線

人生の歩みに於てある一線を越えろと云ふ事は、どうもあるものらしい。その一線を越えて居る人と、越えて居ない人とは、どことなく直ぐわかる所がある。それは自分と云ふものに囚はれて居るのと、自分と云ふものに囚はれて居ないのとであると云ふ事は出来ないであらうか。

その一線を越えさへすればよいと云ふものではない。それからの歩みこそ大切なのである。何故と云ふに、それからの一歩々々は、自分の足で自分が歩むのではあるけれども、それは凡ての人に通用する歩みであるからである。それはどう云ふ事であるかと云ふと、それからの一歩々々に見た事聞いた事、現はれた事出来た事は、それが皆全人類の寶となり光となり力となるものであるから。

二 通りの越え方

ある點まで自分に囚はれないやうにはみんなして居るのである。自分に囚はれる事を露骨にやつたなら、人間社會の生活に柔らぎは少しもつかないであらう。人間の生活が兎も角もどうにかかうにか轉がつて行くのは、假令表面だけにしても、自分にだけ囚はれる事をしないやうにと、みんなが心掛けて行く所から出来て行くのだと云はなければならぬ。しかし、一線を越える越えないの問題は、さう云ふ表面だけの事を云ふのではなく、寧ろ内實の問題なのである。内實に於て一點自分に囚はれる所があるなれば、それはどうしても何かの姿で表面に出て来る。その内實が碎け切つて居るかどうかと云ふ事が、一線を越えて居るがどうかの分るゝ所なのである。

自分を正直に見て行き／＼して、終にその一點に突き當る時、どうともする事の出来ない自分自身の正體を見出すであらう。そこで自身に絶望する。その時自身が碎ける。その時一線を

越える。

一線を越えら迄のつきつめ方に二通りある。外からの出来事に依つて、自分が追ひつめられて、自身の力のどうする事も出来ないものである事を知らされるのが一つ。自分の姿を自分で正直に見て行き／＼して、終に最後の一点、最中心の一点、云はゞ自分の核とも云ふべきものに突き當り、それが「自我」の塊である事に氣づかせられるのが一つ。

どちらにしても、自分でどうともならない眼に合はされて、自身を投げ出すと、そこには必ず一新生面が開け、自分であつて自分でない生き方を暗示又は明示せられる。それが自分に囚はれない生き方なのである。それは二通りの越え方のどちらから行つても、そこへ出て来た後の趣は同じものであるらしい。

只少し異なる所があるやうである。少しではあるが、それは重大な異りであるかも知れない。それは、外からの事情に追ひつめられて一線を越えさせられたのは、一線を越えてからの後がぼんやりし易い。バツと新風光が開ける事は開けるが、又その時の模様は同じ事ではあるらしいが、それなりぼんやりと鈍り易い傾がある。それを鈍らせないで、ずん／＼伸びさせ、生長

させ、展開させて行く爲めには、それから後の育て方、歩み方が餘程大切なやうに思はれる。

所が一方の、自分自身の正體を正直に見つめて行く方から行きつまつて、最後の一点が碎け、所謂一線を越えさせられたのは、その瞬間はさうはつきりとせず、寧ろぼんやりとして居るやうに思はれる位であつても、云はゞ、それ自身の中にだん／＼成長し、開展し、伸びて行く力を具へて居るのであるらしく、次第々々に明らかになり、はつきりとして来て、新生活の新風光がずん／＼現前されて行くものゝやうである。

彼の先覺の教に觸れて開眼させられると云ふのも、外からの力に依つてせしめられるのであるから、育て難く伸ばし難い方に屬するものであるらしく、それを枯らさず、滯らさず、どこ迄も進めて行くのには、餘程細心の用意を要するものなのであらう。

どちらが難しい？

そんなにむづかしい事を、なぜそんなに骨を折つてしなければならぬのであらうかとは思

うてはならない。むつかしいのは道を求め、信に生きる事ではなくして、道を見失ひ、信に醒めずして、生活して行かうとする事の方なのである。むつかしいとは云へ、一方は出来ない事ではないのであるが、一方はとも出来る事ではないのである。見るがよい。信なくして生きて居る人があるか。道に依らずして生活して居る人があるか。信なく道なきは生活でなくして、死滅である。如何に大がりに動いて居るとしても、只肉塊が蠢動して居るに過ぎないのである。

行く方が易い

易いやうに見えても、行くべき所へ行く事が出来ないでは、何んにもならないではないか。むつかしいやうに見えても、道が無いのではない。而も只その一道しかないのだとして見れば、足を上げて行かないわけには行かぬではないか。行かない方がむづかしく、行く方は易いのである。大切な事を思ひ違ひしてはならない。

道が云ふ

道に依らないやり方は皆行き詰り、亂れ、むづかしくなる事になつて居るから、私は只自身を開いて待つて居りさへすれば、氣のついた者からくゞだんくゞに私を通つて呉れるやうになるから、骨は折れませんと道が云つて居るやうな氣がする。

どちらからでも

一面から云へば自分が限りなく小さいものである氣がし、一面には又自分が限りなく大きなものである氣がすると云ふ人がある。自分と云ふものを氣をつけて見るやうになると、その淺ましいところがだんくゞ眼について來て、たうとう自分と云ふものは全く駄目なものであつたのだと云ふ事がわかり、これまで自分々々と思つて居つたものは、何ものでもなかつたのだと

云ふ事になる。さうなると、自分は無くなつてしまつて、そこには只限りのないものだけがある事がわかる。

これは反對に自分と云ふものゝ、よい所がだん／＼見えて来て、そのよいものゝ依つて来る源へ廻つて行き、たうとう、それがこれ迄自分々々と思つて来たやうなものに屬して居るものでない事が知れて來、自分をつきぬけて了ひ、限りのないところへ出て行く事になつても同じであるものらしい。

どちらにしても自分と云ふものが無くなつてしまふ所から、限りのないものになつて行くので、そこに至ればつまり同じ事であると思はれない。

金が要ると思ふ時

生きる道に一心不亂になつて生き切つて居る時には、金が要ると云ふ氣は起らない。金が欲しいと云ふ氣がする時には、自分が生きる道に精進して居ない時である事を感じる。

物心一如

道に生きるのを精神的生活と呼び、物質的生活と對立するものゝやうに云ふのは當らない。物質と對立した精神と云ふものだけに重きをおくやうな事で生きられるものではない。物質と云ふのは何であるか。精神と云ふのは何であるか。生命の生きて行く姿を外から見た時に物質となり、内から見た時に精神となる。内ばかりもなく、外ばかりもない。内外は一つものゝ両面である。両面が見えてこそ始めて、一面の意義もわかり價值も知れる。道に生きるものは物質を無視せずして尊重する。精神に囚はるゝ事なく、その意味を正視する。そして常に生命の力を物心一如の境に注ぎ、只一筋の生命を生かして進む。

他を救ふ道

自分の姿を細かに見て居ると、他の人の事がよくわかる。しかし只わかつただけでは足りない。その上でよい方へと共々に進んで行く事が大切であるのだが、それが出来る爲めには、自分があらゆる姿を持つて居りながら、救はれて居るものである事が、はつきりとわかつて居なくてはならない。自分が恵まれて居るものであると云ふ氣分が働いて、同じ姿の他の人々を救ひに氣づかせる事が出来るのである。

賭博に耽る人

賭博に耽つて仕事も手につかず、妻子や親族友人とも隔てが出来、自分の氣持は荒んで、淋しくて仕方のない事になつて居る人に向つて、賭博をして居れば、仕事が手につかなくなるだらう、妻子や親族友人と隔てが出来るだらう、自分の氣持は荒んで来るだらう、淋しくて仕方があるまいと話したところ、さうだ、その通りだとなづいて聞いて居たが、いつの間にか氣持が變つて少し賑やかになり、仕事をさせて呉れ、ばすると云ひ出し、それからだん／＼みんな

なども仲良くなつて來出したと云ふ事である。

打ち開ける徳

どんな事でも打開けて話せる人を一人もつて居ると云ふ事は、打開けられない事が一つもないと云ふ事である。凡ての良き事は打開ける時にます／＼良さを増し、凡ての悪き事は打開けると悪くなるものであるから、一切を打開ける事の出来る人は、悪い事は一つもなくなり、良い事ばかりになる筈である。夫婦の間に一切を打開けて行け。友人との間に一切を打開けて行け。打開ける事の出来る程度に應じて、その仲は良くなるであらう。一切の事を皆打開ける事が出来る爲めには、何んの野心も持たない事にならなければならぬ。

物のよさ

物を人に上げる事が清く朗らかに出来るやうになれば、又人から物を貰ふ事も氣持よく出来るやうになる。人から貰つた物は、呉れた人の氣持のよさをこちらが感取する事の出来る程度に應じてよさを増すものである。物を貰ふ事は、氣持をも併せ貰ふ事に依つて、人生を豊かにするものである。

自分を上げる事

自分も亦一つの生きた品物である。上げる品物が無い時には自分を持つて行つて、ある時間だけ先方へ上げる事にするがよい。出来るだけ良い品物となつて。

仕事をする時の心掛

仕事をする時に、これをする事が誰れかの爲めになると思ふと、すぐそれが邪魔になる。そ

の人へは恩をさせる事になり、自分は自惚れる事になる。仕事をする時には、常に自分の仕足りない事を思ひ、邪魔にならないであらうかを省み、常にこれでよいでせうか、若しいけない所があつたら、どうぞ云つて下さい、出来るだけ改めますからと云ふ氣持でして行く事が大切である。

仕事のある所へ

仕事のない所には居ないやうにし、仕事のある所を探して行くやうにし度い。しかし身體が疲れたら休むのが仕事であり、眠くなつたら眠るのが仕事であり、病氣になつたら養生するのが仕事である事を忘れてはならない。併し場合に依つては一身の生死も寢食も願ふる暇もなく従事しなければならぬ仕事もある事を忘れて居てはならない。

無一物、赤裸々

人間は皆無一物の赤裸々な姿でこの世へ生れて来たものであつて、さうして只自分達の仕事に依つて自然物を按排し驅使して、今日の文明も財産も皆自ら造り出したものである。自分も亦無一物で赤裸々な姿で生れて来たものであるから、先人の遺しておいて呉れたこの文明や財産を感謝しつゝ、何か身に適うた事をして、良い物をこの世に創り出して貢献しなければならぬ。それ故に又萬一の場合、無一物になつても赤裸になつても、これではだめだと思つてはならぬ。その中に生きて行き、創り出して行く、生命本來の働きを營んで行かなければならぬ。そして、それが仕事なのである。仕事こそ生命本來の姿と云つて差支ないのではあるまいか。

不平不足の根が掘り返される

不平を云はない、不足を思はないと云ふ事は、どこから出て来るか。どうせ人間の世は何事も思ふやうに行くものではない。だから、不平を云つたところで仕方がない、不足を思つたところで仕方がないと云ふのもあらう。一つの思ふ事が叶へば、又一つ思ふ事が増へる。一つの慾が満たされば、又次の慾が起る。だから不平や不足はきりがないと云ふのもあらう。しかしかう云ふ考から不平や不足を止めようとした所で、それはなかく止むものではあるまい。それ位の事で掘り返されて了ふやうな、そんな浅い不平や不足の根ではない。

不平や不足が絶対に起らなくなるのは、よし起つてもどうしても消えて無くならざるを得ないのは、自分と云ふものゝ姿に氣がついて、その何ものでもない事がわかつて来る所から、こんな自分自身であるもの、どんな事をせられたからと云つて、どんな目に遭つたからと云つて、不平や不足のあらう筈がないと、自身が碎け切つたところから、何ものもあてに出来る自

分でない、わかつて来る所からでなくてはならない。

不平や不足が起ると云ふのは、自分に何か取柄があると思ひ、これ位の事はして呉れてもよさうなものであるのにと云ふ氣があるからである。自是自認の心持がある所には、不平不足の萌しが常にある。それが碎けてしまったところには、不平不足の芽の出る根がないのである。

忘れてならない事

泊めてやらうと云うて下されば、泊めて貰ふがよい。食べよと云うて下されば、食べさせて貰ふがよい。物を下されば貰ふがよい。只忘れてならない事は難有く思ふ心持である。

泊めて貰ひ度いと思つたら頼むがよい。食べさせて貰ひ度いと思ふ時も同じ事。只忘れてならない事は、頼んだ通りにして貰はれない時、不足に思はないと云ふ事である。

事は無くならず

外からはどんな事が出来て来るかも知れない。自分の所に無ければ、他所のをでも引受けなければならぬ。事が無くなると云ふ事はあり得ない事である。只次から次へと起つて来る出来事に當つて行く間に、自分自身の道を明らかにし、良くし、しつかりとさせて行く事に依つて、だんく事に處して行く行き方がよくなつて来る事を感じる。

何を目ざして

節約に節約を重ね、勤勉に勤勉を積んで巨萬の富を得た人が、老後何の爲すべき事もなくなり、物質上には些の不満も不足もないのであるが、さてなんと云ふ事なしに満たされないと云ふ事があり、自分でもどうしたらよいのかわからず、他の者もどうして上げたらいのかわから

ず、やる瀬ない日々を送つて居る人があると云ふ事である。

どうしても學位を得度いと思つて一心に勉強し、その人の妻も夫に學位を得させ度いと思つて、あらゆる犠牲を拂ひ、行き度い所へも行かず、仕度い事もせず、夫婦共に只出世々と出世をばかり目掛けて努力し、漸くにしてその望みを達する事は出来たのだが、その時はもう夫も老ひ妻も衰へ、さて夫婦の仕合せを全うしようとしても、心身共に相距る事遠くして、しつくりと行かず、やる瀬ない悩みをどうする事も出来ず、何の爲めに一生努力して来たのか、わからぬやうな事になつて居る人があると云ふ事である。

かう云ふ人は世間に尠からずあるのかも知れない。眞面目な人々であり、努力を厭はない人であるのに、一代がさう云ふやる瀬ない事に終ると云ふのは、如何にも同情に堪へない事である。

と云つてそれ等の人々が目ざす所の目的が一生成就しないで、どうかして〜と努力しながら死んで行つたら、その方が仕合せであると云ふ事も出来ないのであらう。所謂中道にして仆れると云ふ事になるのがよいとはどうして云へよう。

して見れば、成し遂けてもよいと云へず、成し遂げる事が出来なくては、固よりよいと云ふ事の出来ないやうな、そんな事を一生の目的として目ざしたと云ふ所にその人々の不仕合せの原因があると云はなければならぬ。ではどう云ふ所に重點を置いて人間の一生は營んで行つたらよいのであらうか。

子を育て、行く事に自分の凡てを置いて行くと云ふ人もある。しかし子の無い人もあり、子に死なれる人もあり、子故に悩む人もある。さう云ふ事になると、それもこはれて了ふではないか。

自分自身より外のものに重きを置いての生き方は皆同じ嘆きに陥る。只一つ自分自身に凡てを見て行く生き方のみが、どこまでも行き詰る事なく自身を生かして行くのではあるまいか。

節約勤勉を一代の仕事にした人でも、さうして金を貯へる事に重きを置くのでなく、節約をして行き勤勉に仕事をして行く事に喜びを見出し、そこに値うちを認めてやつて行くのであつたら、いくら年老いても、その體力に應じ、精神力に應じ、出来るだけの節約勤勉を生命あらん限り努めて、それを樂みそれに生きて行く事が出来るであらう。決して何んにもする事が無

くなつたとか、どうしたらよいかわからない意屈さにおそはれるとか云ふ事は無いであらう。

出世を望んだ人にしても、出世を望んで働く自分自身の働きそのものに味ひを認めて行つたならば、幾ら出世しても、もうこれでよいと云ふ事はなく、矢張り次から次へと出世を望んで努めて行く自分の働を止めないで、そこに限りなき仕合せを味うて行く事が出来るであらう。學位よりも研究に、地位や名譽よりも仕事そのものに生きて行く事になつたら、そこには無限に生きる道が開けて行くに相違ない。

子を愛する事でも、妻を愛する事でも、同じ事である。子がどんな人間になるか、ならないかと云ふ事に重きを置くのではなく、自分が愛する、その愛の働きに價値を感じて行くのであれば、子はどうなろうとも、よし自分よりも早世してはうとも、自分の愛すると云ふ働きは、少しも止む事はなく、どこ迄も子の上に注ぐ事が出来、そこに自分の生命は伸びて行くであらう。さう云ふ愛は又わが子にだけ止るものでなく、縁ある凡ての人に及ぼす事になり、どこまで行つても、ますます生き／＼と生きて行く事になるのみで、行き詰る事もなく、意屈する事

もなく眞に生き切る事が出来るに相違ない。

自分より他のものがどうであらうとも、少しも自分の生きる事を妨げられる事のない道を進んで行くのでなくてはならない。

メグリ、の塊

何物もわが物ではない。家も身も夫も子も皆わが物でないとわかつて家を出で、降りしきる雪の中に一夜を立ち盡した時に、自分は、メグリ（罪業）の塊りであるとわかつた、その瞬間にすが／＼しい氣持になつたと云ふ人がある。

知らぬ間に

いさ味のない話だなと思つて聽いて居る間に、いつとはなしに涙が出て来て仕方がなく、だ

んくそれが激しくなつて、傍の人々にきまりが悪い程であつたが、それから不思議に氣が變つて、一年間もこ達はつて居つた事がすなほに溶けて了ひ、らくにこれまでの意地を捨てる事が出来て、自由な廣い伸び／＼とした生活に入る事が出来たと云ふ人がある。

自分では知らない間に教が自分の中に入り込んで来て、「我」を溶かして呉れたのであらう。涙は「我」の溶けて流れたものなのであらう。

皆 忘 れ て

忘れて了ふ事は覺えて居なくても差支ない事が多い。忘れる事の出来ない事だけが自分の生命となつて働くのである。よいかげんな事は皆忘れて了ひ捨て、了つて、どうしても忘れる事の出来ない事だけを、深く／＼祈り切つて行き度い。

云はずに居られぬ事

覺えて居て話す事や、思ひついて話す事や、考へ／＼話す事は、聞いても聞かなくても、さして効能の無い事が多い。そんな事は話して了つて、その後云はずに居られない事を云ふのだけが聞く値うちのある事である。

金が何故欲しいか

金が欲しいと思ふ心持に二通りあるやうに思はれる。自分の志を伸べ、自分の天分を表現する爲めに、金が欲しいと思ふのと、遊んで居て食べて行き度いと思ひ、好きな樂みを恣まにしたいと思ふ所から、金が欲しいと思ふのとである。

所が自分の志を伸べ、天分を表現し度いと思ふ方は、その志の如何にも依るが、金が有れば

有るに越した事はないのだが、無ければ無くて、どうにかして志を遂げて行く道を工夫する所に生甲斐を見つける事も出来るから、金が無いからとて、どうにも仕方がないと云ふ事はないであらう。所が一方の金を持つて遊んで暮さう、金の力で享樂を恣まにしようとする方は、金が無ければ全く出来ない事なのだから、金が欲しいと云ふ執着も、この方が一層強いのである。

元來金と云ふものは、人間が過去に勞働した、その仕事から生れたものゝ蓄積であるのだから、尊いものであり、大切なものである事は云ふ迄もなく、又それは直ぐ現在及將來の生活の爲めに役立つ事が出来る重寶なものに相違ないので、有れば有るに越した事はなく、無い方がよいと云ふ事は固よりないのであるが、どうしても無くてはならないと云ふやうなものではないのである。これから後、何んにもしないで遊んで暮し度いとか、自分の働き以上の樂しみを得度いとか思へば、金が無ければ困ると云ふ事になるのであるが、自分出来る仕事をして行く事に樂みを覺えるものには、金が無く困ると云ふ事はない筈である。金が無ければ無いで、出来るだけの仕事をして、そこに生きて行かうとするであらう。金に頼らうとする生活

は、過去の自分の働きとか他の人の働きとかに頼つて生きて行かうとする事であつて、自分自身のこれからの働きに生きて行かうとする者は、さう金々と金にばかり重きを措かないで、やつて行くのであらう。

わが子に

子供に金を遺してやり度いと思ふのは、自分に金が欲しい氣があり、金を持つて居る事が幸福であると思ふ心持があるから、子供にも金を遺してやるのが、その子の幸福を計つてやる所以だと考へるのである。金は自分が仕事をしたのが、金になつて残つて居るのだから、云はゞ自分の生命が形を變へて、金になつて居るのだと云ふ事も出来る位のものであるから、遺してやる事が出来れば、遺してやるのもよいであらうが、自分が金が無ければ無いやうにやつて行く道を知つて居り、そこに又それ相當の幸福を見つける道を知つて居るなら、子供にも強い金を遺してやらなければならぬと思はないで済むであらう。

教育の事にしても同じ事である。子供に相當の教育をし度いと云ふ事は、親として最も心を用ふる所であるが、固より出来れば幾らでも教育をしてやるに越した事はないが、自分が學問以上智識以上に、幸福になれる道を知つて居り、それを日々自分の生活上に味うて行つて居るなれば、無理に教育をしなければならぬと思つて、悩み煩ふ事はないであらう。出来ればしてやるし、出来なければその儘で、どちらにしても、自分の味うて居る生活の道を子供に得させる事に、祈りをこめて行くであらう。

道に依る仕事の仕振り

店の經營を道にかなへてやつて行くには、どうしたらよいのであらうかとよく尋ねられる。道にかなうた生活をして行くには、これまでして來た仕事をやめてしまはなければならぬ氣がするともよく云はれる。

止めてしまふのは仕事ではなくて、他の人を利用しようとしたり、うそを云つたり、腹を立

てたり、虚榮を張つたりするやうな事であらう。さう云ふ事が止んで了へば、身體も心も仕事をして行く事にばかり使つて行く事が出来るから、仕事には一層實^みがある事になるばかりであらう。

店にしても仕事にしても、それに依つて自分を支へて行かうとし、それに依つて支へて行かなければ、自分が立ち行かないと思ひ、その爲めに店も仕事もやつて行くのだと云ふ事になると、どうしてもそこいらくゝの濁りが入つて來、障りが出来るに相違ない。

それが道をわからせられて、自分は何物に依つても支へようとするには及ばないものだと思ふ事がわかり、全く手ばなしで生きもし、死にもして行くのだと云ふ事が知れて來ると、これまでいろくと思ひ惱んで來た事が、すっかり消え去り、もう少しも起つて來ない事になり、自分の身心共にすつきりとして、かろくゝと仕事一筋に精進する事が出来るやうになる。仕事は止める事になるのではなく、仕事の邪魔になつて居たいろくゝの心づかひを、全く止める事になるのが、道の生活である。

さうなると、自分と云ふものは、もう誰れのものでもなく、天地の力に生かされて生きて居

るものが、その天分の仕事をして行く事になるだけである。何も他の事に妨げられる事も、歪められる事もないから、天分のまゝが十分に發揮せられる事になるに相違ない。そしてその人の天分がこれ迄従事して来た職に適するものであつたら、矢張りそれに従事する事になるであらうし、何か他の職に適するのであつたら、その方へ轉ずる事になるであらう。

さうして自分が少しも他を利用しようと考へないで、只天分のまゝに仕事をして行く事になると、それ迄の仕事の仕振りとは、根本が異つて来る事になるであらう。少しも他を犯さうとする事がないであらう。その仕事に依つて金や品物が産れて來ても、それはみんなのものとして扱ふ事になるであらう。他の人を自分の爲めに利用しようとする事がないであらう。例へば商業を營むにしても、自分の爲めや、自分の家族の爲めにばかり、利益を得ようと思へるやうな事はなくなるであらう。有無相通じて、皆んなの爲めに計る事を、天職として働く事になるであらう。そして一緒に働く人々をば、自分等の召使だなどと思はず、自分等の爲めに働かせようと思はず、その人はその人としての天分を盡して居るのだとして、敬愛の心を以て、共に生き共に働く事になるであらう。さうして仕事をする事に依つて、そこに自らに集つて來

る金や品物は、固より自分等だけのものと思はず、みんなのものとして扱ひ、それをみんなのものとして扱はせて貰ふのが、又一つの自分の天職天分と心得るやうになるであらう。そこに來て呉れるお客をば、自分等の爲めに利用しようと思はないのは固より、お客その人の爲めに、最もよいやうにして上げ度いと云ふ心持で、接して行く事になるであらう。さうなつて行く所から、その店全體の働きも、そこに在る金品も皆道のもの、道の働きとなつて、次第にその光を輝かして行く事になるであらう。

子よりも親を

子供を預つて呉れと云はれる人が時々ある。私に預かつて良い子にして貰ひ度いと云はれるのである。私にそんな力が有るのでもないが、よし私にそれが出來てその子が良くなつたとしても、親の方がもとのまゝであつたら、その子は家庭に歸つてから、また悪くなるかも知れない。子の方は第二としておいて、親の方が先に良くなられ、そんな子を良くする事が出来るや

うになられたら、子の方は私の方へ預らなくても、親の手許で自然に良くする事が出来るであらう。それで私は子供を預つて呉れと云はれる方があると、お子さんよりもあなたをお預りしませうとよく云ふのである。これは皮肉でもなく戯談でもない。眞實の事なのである。

同じ道行き

なんのはからひもなく、生かざるゝまゝに生きて行つて居る有様と云ふものは、不思議な働をするものと見えて、なんととはなしに次から次へと響いて行つて、なんとなくひきつけられると云はれ、考へさせられると云はれ、自分のこれ迄の考へ方は、全然間違つて居つたと云はれ、全くひつくり返つたやうに變られ、氣らくになつたと云はれ、ありのまゝで生きられるやうになつたと云はれ、なんとなくしつかりしたと云はれ、難有い心持がするやうになつたと云はれ、これ迄は皆間違つて居つたと云はれ、こんど始めてあたりまへに立ちかへつたと云はれるやうになつて来る。それがみんながみんな、全く同じ道行きであるのも、不思議と云へば不

思議、當り前と云へば當り前な事である。

神佛のいろく

神佛があると云ふ事を信ずると云ふのにも、いろくの段階がある。神佛が自分を見て居て、よい事をすれば賞めてくれ、悪い事をすれば罰をあてるのだと云ふやうに、ぼんやり信じて居るものもある。一心に頼めば、その頼み方の如何に依つて、こちらの望みをかなへて呉れるのだと信じて、一心を凝らして居るものもある。自分全體を救ひ助けて呉れるのだ、どこまでも悪くて何んの取柄もない自分を、まるく助け救うて呉れるのだと信じて喜んで居るものもある。神佛が自分の心中に教をしてくれ、指圖をしてくれるものと信じ、それに依つて一舉一動をおろそかにしないやうにして居るものもある。

なんとなしに

神とも道とも信心とも云ひもせず、思ひもせず、只その生活の細かな味ひに、なんとなしにその心持が現はれて居るやうな人がなつかしまれる。

責 任

責任々々と云つて、絶えず責任に責められて居る生活は苦しい。そして本當に責任を果す事も出来難いに相違ない。それかと云つて責任を顧みないのもいけない。どちらにも自分に囚はれて居る所がある。仕事と自分とが別々になつて居り、仕事の外に自分が立つて居るところがある。

自分の囚れから脱けて、仕事に自身が溶け込んで了ひ、仕事をして行くより外に、何ものも

無い事になると、そこにはもう責任感もなく、自分の力一杯が仕事の上に現れる事になり、従つて責任と思はずして責任は十分に果されて行く事になるであらう。

吾家に居る人々よ

吾家に居る人々よ。御身等の疲れを休めて呉れ。傷ついて居る所があれば癒やして呉れ。力の足りない所があつたら、それを養うて呉れ。方針の立たない間は、いつ迄なりと吾家に居て、それを立てゝ呉れ。御身等がそれ等の事をする爲めに、私が御役に立つ事があつたら、私は喜んでさせて貰ひ度いと思ふ。

そして力が出来、方針が立つたら、さつさと出て行つて呉れ。自分を十分に生かして、遺憾のない生涯を送つて呉れ。

一つの生きたもの

物質と精神と二つあるやうに思はれるのは、まだ見究め方が足りないのではあるまいか。一つの生きたものゝ生きて行く姿に氣づかされて來ると、物質だとか精神だとか云つて、別々にわけて扱ふ事は出来なくなるのではあるまいか。

自分のシハ

自分のシハがちがつて來るのでなければならぬ。うはべが少々改つて來たからと云つても、シハが全くかはつて來なければ、本當に助かつたと云ふ事にならない。

一 新

自分のシハが改つて來たかどうかと云ふ事は争はれない事である。生活の方針が一新する事なのである。凡てのものゝね、うちのおきどころ、ものゝ見方が全く一變して來るのである。そこは曖昧なものではない。

やりぬくばかり

難有い氣がするかどうかは問題ではない。よい氣持がするかどうかも問題ではない。只どんなに行つたらよいかと云ふ事が、はつきりして來るのである。それをして行くに就ては苦しからうが、難有くなからうが、そんな事はどうでもよい。只常にどうして行つたらよいかと云ふ事ははつきりとして、それをやりぬいて行くばかりなのである。

教 は

私は教を守つて居る氣は少しもしない。守つて居ると云ふやうなものであれば、はづれはすまいかと云ふ氣がして仕方があるまい。又守つて居るのが窮屈で仕方がない氣もするであらう。教は何も守らなければならぬやうな事を云ひつけるものではないのである。只私自身の明らかでなかつた事を明らかにして呉れるのである。だから教に依つてだんく暗かつた事が明らかになり、苦しかつた事が苦しくなくなり、わからなかつた事がわかるやうになつて来る。それで自由にやつて行けるやうになるのである。

教がわかると云ふ事は

教が何か自分に云ひつけるものゝやうに思うのは、教と云ふものゝして呉れる本當の働きが

未だわかつて居ないのである。教は自分のしなければならぬ事を命令するものではなくて、自分を照らして呉れて、自分の困つて居るところや、迷つて居るところを明らかにして呉れ、どうしてさう云ふ悩みや迷ひが起つて来て居るか云ふわけに氣づかせて呉れるものなのである。そこで自分のこれからのやつて行きやうがわかり、どうしたら助かるかと云ふ事が知れて来るのである。だから教を聴くと云ふ事は決して苦しい事ではなく、窮屈な事ではなく、それを境にらくになり、明るくなり、しつかりとして来るものなのである。

さう云ふわけであるから、教がわかると云ふ事は、いつでもどんな工合にと云ふ事がはつきりとして居る筈なので、あの時のあの教で助かつたと云ふ事が明らかでないやうな助かり方はないのである。ましてや助かつて居るのやら、助かつて居ないのであらわらないと云ふやうな、ぼんやりとしたものであらう筈がないのである。

光

教は光である。光に照らされる事に依つて、自分の姿が明らかになり、悩みの原因も、迷ひの姿もはつきりとわからせられるのである。だから教に觸れる事は苦しい氣がし、出来れば避け度い氣もするのであるけれども、本當は光に照らされるのがいやなと云ふ事があらう筈はないので、本來なれば少しでも明るい光に照らされて、明らかになり度いと云ふのが、誰れしもの望む所でなければならぬのである。それを光を厭ふと云ふのは、自分の淺ましい姿が見せつけられるのを厭ふのである。だからこそ一層照らしつけられなければならぬわけなのである。

自分が自身のものでない

自分が自身のものでないと云ふ事が明らかになり、自分を自身の勝手にしない事になると、一見身動きも出来ない窮屈な生活のやうに見えるので、そんな事になつて何んの樂みがあるかと云ふやうなものであるが、事實さうならせられて見ると、そこには限りの無い生命の喜びが

催して來て、此の上もなく賑やかに生きる事になるのである。

祈り

祈ると云ふ事は、自分が自身のものでない事がわかり、生かされて生きて居るものである事が知れた時、その生き方全體が祈りとなるのであつて、その他の意味での祈りと云ふ事はあり得ないのであるまいか。

暗示

聞いて居るといふ事の暗示を興へて呉れる話があり、讀んで居ると、そこに書いてある以外のいろ／＼の事に氣づかせて呉れる文章がある。深く廣く豊かな生活から出て來たものであるからなのであらう。

話

話した後でいやな淋しさを感じるのは、自分の實感を離れて誇張した話をした爲めであるらしい。さればと云つて話した後で誇らしさを感じるのも、落ちつきのよくない事である。幾ら話しても何んにも話さなかつたのと同じやうな心持である時、一番工合がよいやうである。

心持は浮ぶ

心持は浮んで来るものである。自分の力で思ふまゝの心持をこしらへる事が出来るやうに思ふのであるが、さうではないらしい。どんな心持が浮んで来るかと云ふ事は、自分の力でどうする事も出来るのではなく、底からく浮んで来るのである。それがどんなのが浮んで来るかと云ふ事に依つて、自分の偽らざる境地がわかるのである。その境地々に依つて浮んで来る

心持の色も香も品も調子も異ふのであつて、自分の力みや考へ位で、どうともする事は出来るものではないのである。よい心持を持ち度いと思へば、自分の境地の進む事を心掛けるより外に道はないのである。

境地

自分の境地はどうして進むものか。生命に自由の成長を許さへすれば、生命自身がだんくくと自らの境地を進んで行くものであるらしい。生命に自由の成長をさせるとは、「我」の殻の中に閉ぢ込めない事である。これまで生命の自由の成長を抑へて居た「我」の執着を放れさへすれば、生命はそれ自身の成長の途に就くのであつて、それからは他からどうせられなくても、自分で適當の養分を取り、自分で方向を定めて、だんくくと自身の境地を進めて行くのが、生命本來の機能であるらしく思はれる。

「我」に囚はれて居る間は、生命が「我」の殻の中に閉ぢ込められて惱んでばかり居るので、

幾ら年をとつても、同じ程度の事を只複雑に繰り返すに過ぎないので、少しも進展するところがない。それはちやうど船が錨をおろしたまゝ、港の中をぐる／＼廻つてばかり居るのと同じやうなものである。「我」を脱けると、船が港を出たやうなもので、それから月日と共に廣く自由な世界に進んで行く事が出来る。それがどれ位進んで居るか、どの程度の地位に居るものであるかと云ふ事は、言葉からでも行からでも直ぐわかるもので、そこに争はれぬところが出て来るものである。

さうして一旦「我」の殻を出て伸び始めた生命も、復たいつの間にかやが殻の中におさまり度がるものである。どの種の殻の中におさまつても、生命はそれ限り伸びる事を止めて了ふものであるから、そんな事にならないやうにする事が大切である。そんな事にならないやうにするに云つても、別にどうすると云ふのでもなく、生命そのものゝ伸びて行くのに素直に忠實に従うて行くより外はないので、別にどう努めると云ふやうな事があるのではないらしい。

三つの心掛け

信心の話を聞いて云ふに云へない良い心持になる事が出来た。それをどうしたら持ち續けて行く事が出来ようかと云はれる人がある。話を聞いて良い氣持になる事が出来たのは、話す人の良い氣持が自分に響いて来て、こちらの心持をさうならせて呉れて居るのである。その人に遠ざかると、又元の通りに亂れもし、濁りもするおそれがある。どうしたらこれを續けて行く事が出来ようかと云ふ案じ心があるのが、もう既に持ち續け難いと云ふ氣がして居るからである。

良い氣持になるには、さうなる事の出来る生き方があるのである。生き方、くらし方をそのやうにしないで、心持だけ良くし度いと云うても、それは出来ない相談である。

そのくらし方と云ふのは、三つの心掛けから成立つて居る。その一つは他のものをあてにしないと云ふ事である。第二は自分の出来る事は喜んでして行くと云ふ事である。第三は自分に

出来ない事はお詫びをすると云ふ事である。

他のものをあてにしないと云ふのは、他のものはあてになるものではないのだから、あてにしないのである。あてになるのをあてにすなと云ふのではない。あてにならないものであるのだから、あてにしようとするなと云ふのである。凡ての不平不足が皆あてにならない他のものを、あてにしようとするところから起つて來て居るので、あてにしさへしなければ、不平も不足も起る筈がないのである。あてにさへしなければ、腹の立つ事も無いし、疑ひや憎みの起る事もないのである。

次に自分の出来る事はなんでもしようと思ふ心掛けが大切なのであるが、これにはさうして自分がして行く事を自ら喜んですると云ふ事が大切なのである。自分がするからと云つて、恩に被せたり、禮を求めたり、さうして他の人を習はせようとしたりしてはいけない。そんな事を思ふと、又そこに平らかならぬ心持が起り易い。恩に被せ度くなつたり、禮を求め度くなるやうであつたら、寧ろしない方がよいのである。自分で出来る事をすると思ふ事を、只自身が喜んでさせて貰へるだけして行く事にするがよいのである。どれだけしなければならぬと云

ふ事はないのであるから、無理になる程しなくてよいのである。

第三に大切な事は、自分に出来ない事は、素直に誰れにでもお詫びを云ふ事にするがよい。出来る事よりも、出来ない事の方が數限りなく多いのである。自分の力で出来る事は知れたものである。出来ない事に就ては、凡て私に出来ませんからお許し下さいと云ふお詫びの心持を持つ事が大切である。出来ないのだから仕方があるかと云ふやうな心持で居てはならない。出来ればさせて貰ふのだが、自分に出来ないのだから、どうぞ許して下さいと云ふ心持を持つ事が大切である。

出来ない事はお詫びをすると云ふ道は實によい道である。その道を捨て、お詫びなんかするものかと云ふやうな氣位で居る事は、人生に於てらくになる事の出来る大切な道を捨て、顧みない事であつて、實に惜しい事なのである。

この三つの心掛けで生活をして行きさへすれば、これ迄の氣持の蟠りや濁りは無くなつて來、これからはそんな事にならないで、いつもく生きくとした清々しい氣持で暮して行く事が出来るのである。

お詫びの道

お詫びをする事に依つて、どんなに廣大な世界が開けて来るものか。自分で出来る事は實に知れたものである。お詫びをしないと云ふ事になれば、只自分で出来る事だけしか自分の領分はない事になる。所で自分の力で出来る事はほんの僅かなもので、時々それが途切れたりする。そこで始終行き詰つたやうな氣がし、どうなる事やらと云ふ案じ心が絶えないのである。お詫びをする時には、自分の領分以外が皆通らせて貰はれる事になるのである。その廣大さと云ふものは全く限りがない。

お詫びをし度くないと云ふのは自分の力みである。「我」のさせる仕業である。お詫びをしないと云ふ事になると、自分の狭い領分内しか生きられないのであるから、信心の良い話を聞いても、それが自分だけの狭い殻の中に閉ぢ込められて了ふから、伸びようにも伸びられず、榮えようにも榮えられず、そのまゝ萎縮して了ふのであるが、お詫びする事に依つて、自分の

「我」が碎けて了ふと、それと同時に廣い天地が開けて来て、信心の心持も月日と共に伸びに伸び、榮えに榮えて限りない事になるであらう。

前に掲げた三つの事、あてにしない事、自分からしようとする事、お詫びする事、この三つの中で、自分の力で出来る事をしようとする事に大抵一番力を注いで居るのであるが、實はその道が一番狭いので、それはどれ程も通れるのではないのである。あてにしないと云ふ道と、お詫びの道とは廣大限りもないもので、その道を自由に通る事が出来るやうになつてこそ、始めてわれ／＼は本當に、らくな生活が出来るやうになるのである。

絶對絶命の一道

お詫びをすると云ふ事と、許して呉れと云ふ事とは違ふ。お詫びをすると云ふのは、私が悪うありましたと云ふのであつて、これまでの自分を授け出して了ふ事なのである。許して呉れるか呉れないかは、先方の考にある事で、こちらから求める事ではない。眞にお詫びする氣に

は、許して欲しいと云ふ氣は雜らないであらう。これ迄の私のした悪い事に對して、全部の責任を荷ひませう、荷ひ切れないまでも、荷はせて貰はなければ相済みませぬ、荷はれるだけは荷はせて頂きませうと云ふ心持なのである。許され度いと云ふやうな心持は少しもある筈がない。責めてく責めぬかれる事をこそ望むであらう。他から責められるまでもなく、自分で責めてく責めぬく心持が、お詫びの心持である。

そこから不安も迷ひもない境地に入るのである。不安があり迷ひがあると云ふのは、自分に未だ餘裕があり、それが失はれはすまいかと思ふ所から、不安があり迷ひが起るのである。お詫びし切つて、もう少しの残す餘地もなく、自分に許すところ、微塵もない事になつたなれば、それより他に道はなく、一筋に定まり、一點に集つて了ふから、不安の餘地も、迷ひの餘地もありはしないのである。らくと云へばそこかららくになり、安心と云へばさう云ふ安心がそこに生れて來るのである。絶對絶命の安心であり、らくである。どんな事をも避けず、少しの僥倖も期待しない安心であり、らくであるのだから、しつかりしたものなのである。

許され度いと云ふやうな心持が少しでもあつたら、さうは行かない。許して呉れるかどうか

がわからないと云ふ不安が、直ぐ伴ふであらう。お詫びし切る時に、自分の「我」は根本から碎けて、無我に入るのである。前に掲げた三ヶ條の中、あてにならない事を知つて、あてにしないと云ふのは、無常を知る事であり、お詫びし切ると云ふのは、無我になる事であると云ふ事が出来るであらう。無常を知り、無我になれば、もうそこには只一筋の精進があるだけである。それが自分出来るだけの事をさせて貰はうとする姿である。精進は無常と無我とに裏づけられてこそ、始めて出て來るものであらう。無常と無我とに氣がつけば、あとはもう精進よりほかはない事になると云ふのが、われく^くの生命の姿なのではあるまいか。

無常、無我

教を聞いて難有いと云ふ人、わかつたと云ふ人、これからやりますと云ふ人、氣持が變つたと云ふ人、それ等の人々がよく後戻りがしたと云はれ、あの時はわかつた氣がしたが、どうも續かないと云はれ、いろく^く悩まれる事がよくある。それかと思ふと、一度氣づかせられた

ら、それが日が経つに従つて伸びて行き、進んで行き、ずん／＼行くべき所へ行かれる人があ
る。この両方の人々のどこが違ふので、さう云ふ事になるのであらうかと考へて見ると、無常
と無我とはつきりと氣づかれて居るのと居ないのとの依ると思はれる。無常はわかつて、
無我がわからないと、惱み迷ひの根が切れない。無我がわかれば、無常は一緒にわかるものら
しい。無常だけわかつたのでは、無我までわかるとは限らない。あてにならないものだ、あて
にしたのがこちらが悪かつたのだと云つて居つても、それがどれ程も自分の救ひにならず、ま
たしてもいろ／＼の不平や不満に囚はれる事が多いのは、それだけに止つて了つて、進んであ
てにならないものをあてにしようとしたのは、何故であつたか、何者の仕業であつたかと追及
して行かないからである。さう追及して行くと、「我」の正體に氣づくであらう。「我」とは何ぞ
やと、更に追求して行くと、それは自分の迷ひの塊であつた事に氣づかせられ、そこに始めて
無我に醒めるのであるが、そこまでの道中は、さう容易いものではない。わかると云へば直ぐ
にもわかるのであるが、わからないとなつたら、なか／＼わかるものではない。お詫びの道を
どこまでも／＼追求して行く事が肝要なのであらう。

そのものが

私はお詫びする事はいらぬ、私にはお詫びしなければならぬ事は何もないと云ひ得る
か、どうか。さう云ふ氣位そのものが、お詫びしなければならぬ不遜な氣位なのではあるま
いか。

お詫びの形と心

お詫びは心だけでしておけばよからうと云ふやうなものではない。お詫びのいろ／＼の要素
の中で、形の上に現はすと云ふ事は、重要な要素である。形の上に現さないでは、お詫びは
肝腎な一點が缺けるので、眞のお詫びにならないのである。お詫びを心だけでして、形の上ま
では現はし度くないと云ふのが、既にお詫びを眞實にしようと思ふ事になつて居ない證據なの

である。お詫びは責任を荷ひ切る事であるのだから、どうしても形の上に現れる事を必要とするのである。形をぬきにしてのお詫びは、お詫びと云ふ事は出来ないものである。両手をついてあやまらなければならない。どんな事でも私に出来る事なら、させて貰ひますと云ふ事にならなければならない。

しかし又お詫びは形の上だけでしさへすればよいと云ふやうなものでは固よりない。お詫びの大切な點は心持にある。心持がお詫びせず居られなくなり、これまでの自分が全く間違つて居りましたと云ふ事に気がつくと思ふのが、お詫びの本質である。それが無くして何がお詫びであらう。形の上に現れる事もお詫びの必須の要件であるが、それは限りのないお詫びの心から出て来るのではなくては、何んにもならない。お詫びは限りもなく私が悪かつた、済まないと思ふ氣持から出て来て、動きの取れないお詫びの形となつて現れて、始めて本當のお詫びとなるのであらう。

そして又お詫びはどこまで詫びたとして、これでよいと思ふ事はないのである。それがお詫びの大切な點である。これでよいと思ふのはお詫びの心持ではないのである。お詫びが限りのな

い自分の悪さに氣づかせられた所から出て来て居るのであつたら、これ位でよからうとか、これで済んだとか云ふ事があらうわけがない。お詫びは一度したらそれでよい、それで済んだと思ふやうなものではないのである。お詫びの形は、必ずしも一定のものが續くとは限らない。手をついてあやまると云ふ形が、いつ迄も續くわけでもないが、いろ／＼の形を取つてお詫びの心持は、どこ迄も續いて行くものなのであらう。そこに又お詫びのお詫びたる本質があると思ふ。

人生の秘密

お詫びをするのは苦しい事であるが、それはこれ迄の間違つた自分が碎けて了ふ苦しさであつて、實は喜ぶべき苦しさなのである。

お詫びをし切る時には、そこに限りのない廣々とした世界が開ける。自分が無限に大きくなつた喜びが底から湧き出る。その喜びは全くこの世ならぬ喜びであつて、この世の一切の苦惱

を溶かして餘りあるものである。

お詫びの齎す喜びは、お詫びしなければ出て来るものではない。こんな喜びがこんな所に藏せられてあつたかと、人生の秘密の不可思議さに驚くばかりである。

不思議な救ひ

お詫びは自分がしようと思つた位の事で出来るものではない。人に勧められたとて出来る事ではない。何か爲めにする所あつてするのは、本當のお詫びではない。

お詫びは只自分のこれ迄の悪さに真直ぐに氣がつく所から、お詫びせずに居られない氣が湧き起るに依つて、させられてするのである。だからお詫びは、自分の悪いところを、ごまかさずに見て行く者にでなければ、出来る事でない。お詫びと云ふ人生の不思議な救ひ、秘密の幸は、自分に忠實な、正直者にのみ恵まれる寶である。

手許の自覺から

お詫びは誰れかを相手にしてするのではない。自分の悪さに氣づく所から、せずに居られなくてするのであるから、相手が詫びよと云ふから詫びるのではなく、詫びなくてもよいと云ふからとて止められるのではない。何んの爲めにと云ふ事で詫びるのではないから、どこがどうなつたからと云つて、それで済んだと云へるやうなものではない。只自分自身の手許の自覺から、せずに居られなくてするのである。人を見る事もなく、周圍を考へる事もないのが、お詫びの姿である。

済まぬと云ふ氣持

済まぬと云ふ氣持が強くなるのは、お詫びが徹底して居ないからである。お詫びに残りがあ

るのが、済まぬと云ふ気分となつて現れるのである。お詫びをし切ると、済まぬと云ふ氣持は起らなくなるであらう。自分全體がお詫びになり切ると、氣持だけが済まぬと云ふやうな事を思つて居る必要がなくなるのである。済まぬと思ふ氣分があるから、お詫びして居ると云ふやうなものでなく、済まぬと思はなくなつたから、お詫びの姿でなくなつたと云へるやうなものではない。

一重の隔て

お詫びをすると云ふ道を研究する事を怠つてはならぬ。お詫びをする事に依つて開ける人生の寶庫に氣がついて見ると、こんな所にこんな限りの無いよいものが秘められて居つたのかと驚くばかりである。お詫びをする事に依つて、一重の隔てを突き破つて、そこへ入り込んで行つて見ると、廣大限りもない世界がそこに開けて居て、そこがわれ／＼の領分になる事を待つて居つて呉れるのである。

生きてたもの

教と云ふものは生きてたものである。それが一度自分の中に入り來つて宿る事になると、直ぐにその働きを始めずにはおかないものである。教を聞いて感心すると、これからぼつ／＼行つて行きませうとはよく云はれる事であるが、聞いた時に生命が宿るのでなくて、これからぼつ／＼行つて行かうとして居るやうな事では、時日が經つに従つて感じは薄らいで行く一方で、いつになつても行へる筈がないのである。眞に教が聞えた時は、教の出て來る源の生き方が自分の中に入り來つて、これ迄の生き方に取つて代り、これからの生き方になつて了ふのであるから、全く自分と云ふものゝ中心が一變して了ひ、一新して了ふのであるから、ぼつ／＼行ふなどゝ、そんな事を云うたり思うたりするスキはないのである。自分が變つて了ふのだから、もうこれ迄のやうな事は出來ない事になつて了ふのである。行ふも行はないもない。行はずに居られなくなるのである。

心のあと

どんなに良い事をして、そのあとが残らないやうにし度いものである。事のあととは残るとしても、心のあとをひかないやうにして行き度い。私はこれ／＼の事をしたと云ふ氣持、これは私がしたのだと云ふ氣持、それが少しでもあると、終にはその推積の下に自分が押しつぶされて了つて、生きて行く事が出来ないやうになるであらう。

よく私は云ふ

自分が出来るだけの事をさせて貰ふのは、自分の喜びであるとよく私は云ふ。口に善い事を云ふのは、木草が良い葉を出すやうなものである。心で親切に思ふのは、木草に花が咲くやうなものである。身に仕事をするのは、木草に實がなるやうなものである。木草は葉を出し花を

咲かせ實をならせるのを、皆喜んでして居る。私も自分の仕事をし親切をし、良い言葉を出すのを、自分の喜びとして心から進んでして行き度いと、よく私は云ふ。この事をいつもはつきりと私自身に知らせておき度い爲めに。

生命の喜び

何も他に求める爲めでなく、他をして習はせようとする爲めでもなく、自分の功を積む爲めでもなく、罪を亡ぼす爲めでもなく、只自分自身の生命の伸び行く喜びとして、何事でも自分出来るだけの事をさせて貰ひ度い。これが私の願ひである。

只一つ

自分のこれまでの凡てが間違であつた事に氣づかせられて、自分と云ふものが碎けて了つた

時、もうそこには何もものもないのであるが、その何もものもない中から、只一つ動き出すものがある。それは出来るだけの事はさせて貰はうと云ふ心持である。

天地の喜び

出来るだけの事はさせて貰はうと云ふ心持、それは自分の心持ではあるが、實は天地の動きが自分に現れて動くのであるとしか思はれない。それが滯らず、凝り固らず、すら／＼と伸びて行き、働いて行く時、そこに天地の喜びがある。

どこかに

自分出来るだけの事は何でもさせて貰ひ度いと云ふ願ひが純粹でありさへすれば、させて貰へる仕事が次第に出来て来る。どこかにあれば仕事をし度いと思つて居り、仕事をする氣で

居るから、仕事を授けてやる事にしようと思つて呉れて居るものがあつて、次から次へと仕事を與へて呉れるものゝやうである。

誰れのものでもない

自分が自身のものでなく、それでは誰れかのものかと云ふと、さうでもなく、つまり誰れのものでもないと云ふ事がわかつた時に、始めて本當に大切なものであると云ふ事がわかつて来る。

自分を自身のものだとは、誰れでも思ふ事が出来る心持である。又自分を誰れかのものだと思ひ、何かの團體のものだと思ふ事も亦割合に思ひ得るのであるが、今一つ進んでこれを誰れのものでもないとする事は、ちよつと容易に出来難い事である。しかしそこ迄に至らなければ、どうしてもいろ／＼の差支が出来て来て、末通りたる生き方をして行くわけに行かないのである。

酒

大酒がどうしても止まないと云はれる人に、それが止まなければ、あなたはその爲めに生命を奪はれるに相違ないであらうから、あなたに取つては酒は仇である。仇が眼前に居るのである。して見ればその仇を討たないわけには行かないではないか。あなたが討たなければ、仇の方があなたの生命を取るであらう。どうします？ と云つて上げたら、それに力を得て、さしもの大酒を止められた人がある。

所が一方には、酒が欲しくて仕方のないものを止めようくと幾ら努めて見た所で、努めるあなたの力よりも、飲み度い力の方がどれ程強いのか知れないのだから、そんな事は幾らやつて見た所で効果の舉りさうな筈がない。それよりも酒の事はその儘に放任しておいて、あなたの中に在る何か別の良い働を伸ばして行き働かして行かれたら、その方に興味も出来、生き生きしさも味はれて、酒の方は自然に問題でなくなるでありませうと云つて上げたら、それに暗

示せられて、間もなくその人は店の經營全體を、これ迄は自分のものとしてやつて居つたのを、誰れのものでもないとして、同時にみんなのもだとしての扱ひ振りに改めて行く事にせられ、従つて自身もこれ迄のやうに主人であると云ふ氣位を持たず、共々に使はれて働いて居る者であると云ふ事になつて、萬事その方針から割り出すやうにせられたところ、日々の仕事の仕振りが生きくとして活氣を持つて來、自分が酒を飲んでぼんやりとして居る時間が、假令一時間でも二時間でも惜しい氣がするやうになり、いつの間にもやら大酒に耽るやうな事はなくなつたと云はれてゐる。

あなた全體を

ある所へ講演に行つたら、御禮にと云つて金包みを呉れた。私は云うた。私の講演は少くとも私の生命を掛けてして來た事を話した積りです。御禮を頂くなら、あなた全體を頂きませう。

絶望の中から

悩んで居る人がある。悩みの爲めに、あらゆる人に反抗し度い氣になつて居る。凡てのものね、うちが認められなくなつて居る。それが只その悩みを察し、それを許し、その悩みを共にしようとする人にだけは、反抗しないで相済みませんと云ひ、あらゆるもの、ね、うちが皆無くなつた中に、あなたが私を思つて下さるお心持だけは難有いものとして私に感ぜられ、絶望の中から私を引き戻して下さいましたと語つて居た。

皆 一 つ

道、教、メグリ、信心、おかけ、生命、皆一つものである。一つものであると云ふ事がわかつた時に、わからなければならぬ事をわからせられた氣がする。

極樂は地獄の真中に

どうしたらあなたのやうに、そんならしくさうな氣持でいつも暮して行かれるやうになるのでせうかと聞かれる人があつたから、私は答へた。私はらくをしようとも、らくにならうとも思つては居りません。むしろらくはすまいといつも思つて居るのですが、さう云ふ氣で問題の只中、苦惱の中に入り込んで行かうとして居りますのに、いつもらくで、勿體なくて仕方ないのであります。それで私はよく極樂は地獄の真中にあるらしいと云つて居るのであります。

話は生きたもの

講演などに頼まれた時、聴きに來る人が少いと、主催者から聴衆が少くて済みませんと云は

れる事がよくある。しかし實際話をする者の側から云ふと、聽いて呉れる人が多いと自然話が
大まかになり易いし、少數であると細かに話せるから、どちらがよいとも限らない。話に實^みが
いつて我れ乍ら氣持がよいのは、多勢でも少數でも、その中に本氣に聽いて呉れる人がある事
である。一人でも本氣に聽いて呉れる人があると、話は幾らでも進んで来る。その人がずんず
ん引き出して呉れる氣がする。聽く方の側から云へば、話す者が熱心にならせて呉れるのだと
云ふ事にもなるのであらうが。

私は多勢の前でも少數の人にでも、なるだけ自分のありのまゝを正直に素直に行き届いて語
り現はして聽いて貰ひ度いものだと思ふ。それが割合に出來た氣のする時には氣持がよいし、
それが充分に出來なかつた時には、なんだか淋しいやうな、いやな氣がする。聽いて呉れる人
の多い時に氣持よく話せる事もあり、少い時にさうなる事もある。何れにしても一概には云へ
ない。矢張り一度々々その時のいろ／＼の工合に依る事で、全く話は生きものと思はれな
い。

話が生きたものであると云ふ事は座談の時などによくわかる。そこに集つた人の工合や、そ

の時の様子に依つて、話が次から次へと發展して行つて、氣持よく伸びる事もあるかと思ふ
と、全くさう行かず、途切れ／＼になつて了つて、みんな努力するのだが、努力すればする程
氣まづいものになる事がある。又話は次から次へと順序よく伸びては行くのだが、あまり内容
のない、つまらない話になつて了ふ事もあるし、意義のある深い味ひのある話になる事もあ
る。

その時の話がどうなるかは、話す人にもあるが、聽き手にもある。どちらがどちらとも云へ
ない位のものであらう。

手許へ力を

眼の前のものを大切にしなければならぬ。それが爲めには今の自分の手の届かないところ
へ心を配つたり力を注いだりする事は止めなければならぬ。

教會などで云へば、教會へ參つて來る人を大切に教へ育て、行く事に力を注ぐがよい。來な

人を來させようとして、いろ／＼な骨折りをするよりも、一人でも二人でも、現に參つて來て居る人を大切に教へ導いて、道の本當のところをわからせる事に骨を折るがよい。道が明らかになつて、自分が助かる事が出來たら、別に勧めなくても、その人が又他の人を導いて來るやうになるに相違ない。

商賣などに見れば、自分の店へ來ない人を來させようとして骨を折る事もしなければならぬかも知れないが、現に自分の店へ買ひに來て呉れて居る人を大切にし、満足を與へるやうにして行く事を疎かにしてはならない。そこに充分力を盡して行けば、さう云ふ店へは次第に多くの人が自然に買ひに來て呉れるやうになるに相違ない。

自分の云ふ事、書く事

皮肉を云はず、只の思ひつきや、知つたか振りを云はず、あてこすりを云はず、他を教へようとか導かうとかせず、自分がわからせられて自身が助けられて居るところを素直に云ひ現は

して感謝するのであり度い。そして願はくばそれが深いものであり、高いものであり度い。

さうさせるもの

ちつとよく見ると、腹を立て、居るのには腹を立てずに居られないわけがあるし、仕事をなまけるのには、仕事をする氣にならせないものが、何かあることがわかる。反抗するのにも、贅澤するのにも、慾をするのにも、うそを云ふのにも、皆それをさせるものがあつての事であるのがわかる。それがわかつて見ると、そのものは、又自分のうちにもあるのであつて、他の人にあるのと、あまり異ふものでない事がわかつて來る。さうなるとみんなが一つである事が知れて來、責めるのでもなく、許すのでもなく、反抗もせず、放つてもおかず、同情するのでもなく、嫌ふのでもない一つの心の働きが起つて來る。それは先方も自分も、そんなにならされて居るもの、ものが一つであると云ふ所から起つて來る氣持であつて、それで自他共に救はれる事が開けて來るのである。

育て、行くもの

人々と自分との間柄を大切に育て、行き度い。殊に妻との間、子との間、友人との間など、次第によくなるやうに、成長して行くやうにして行き度い。だん／＼によくなつて行くのでなければ、飽きが來たり、交りが絶えたりするかも知れない。少しづつでも次第によくなつて行くものであるところに、飽きも飽かれもしないところが出て來るものであらう。

夫婦の間

夫婦の間柄は別して年と共に月日と共に成長して行くやうに育て、行かなければならない。二人の間が打解け合つて居れば、だん／＼にお互に工夫し相談して行く事に依つて、次第に育てられて行くのが自然なのであらう。結婚生活には二十代には二十代のよき、三十代には三十

代のよき、四十、五十、六十と、年代相應のよきが生れて來るのでなければ、良い夫婦と云ふ事は出來まいが、それは只結婚したとだけで放任して置いたのでは、さうはなれまい。

子を育てる上に

夫婦の間がよいと云ふ事は、二人のお互の幸福であるだけでなく、その間から流れ出で、にほひ出る温いもの、清いもの、美しいもの、良いものが、仕事の上にも、子供等の上にも、出入の人々の上にも及んで行く事になつて、多くの人々を幸福にするものである。中にも子が育つ爲めには、夫婦の間からの良いものが大切なのであつて、それが子の良くなる一切の源の養ひであるのであらう。子を産む事の爲めに夫婦の間の良い關係が大切であると共に、子を育てる上にも亦それに劣らず大切なものであるのであらう。その點から、老年になつて夫婦の間柄が良いものであると云ふ事は、嘗に自分等の幸福の爲めだけでなく、子供等の爲めにも大切な事であるのだと云ふ事を忘れてはなるまい。

犠 牲

世の中には獨身な人も澤山あるのだし、夫婦生活がよい工合に行かない人もあるのだから、それ等の人々の事を思へば、自分等だけがよい夫婦生活を樂むのは濟まない事であると云ふ考へ方をする人もあるが、不幸な人に同情し、それ等の人々に幸福になつて貰ふ爲めに盡すのは、幾らでも盡さなければならぬのであるけれども、それが爲めに自分等の夫婦関係を犠牲にするのはどうであらう。

衣食の事とか住居の事とかであれば、不幸な人の爲めに煩つ事も出来るのだが、夫婦生活や親子生活はさう云ふ事は出来ない。他の不幸な人の爲めにと云つて、自分等の夫婦生活を犠牲にしたところで、それが不幸な人の爲めにどれだけなると云ふ事もあるものではない。却て不幸な者が増えるばかりである。

夫は妻を幸福にする務めがあり、妻は夫を幸福にする務めがある。夫婦が他の不幸な人々の

爲めにと云つて別れて了つては、よしそれが爲めに慰められる人が他に出来るとしても、夫は妻を不幸にし、妻は夫を不幸にする事になるのを、どうする事も出来はすまい。一方に不幸な者をこしらへては、他の一方に不幸な人を慰める事が幾らか出来るとしても、それがよい事とは云へないであらう。夫婦はどこ迄も一體として、お互の幸福を完うしつゝ、その上で出来るだけ他の爲めにも盡して行くがよい。

固より夫婦となつた以上、どんな事があつても絶対に別れてはならないと云ふのではない。只他の獨身な人とか、夫婦関係のよくない人の爲めにと云ふ事で、自分等の夫婦関係をよくするのを遠慮したり、関係を絶つたりするのは、よい事とは云へまいと思ふのである。

特 別

凡ての人を平等に愛すると云つても、親が子の爲めに盡し、夫婦がお互の爲めに盡し、兄弟が又お互同志盡し合ふのは、そこにそれ／＼特別な所があつてよいのではあるまいか。例へば

わが子と他人の子とを同じやうに愛すると云ふ事になると、他人の子にはその子の親があつて、既に愛して居るのであるから、二重に愛せられる事になり、わが子は特別に親からとしての愛を受ける事はなくなつて、そこに不平等が起るであらう。心持の上では、誰れに對しても同じ深さで愛すると云ふ事も出来もしようし、又多くの人に傾つても、愛の心持が少なくなる。と云ふ事はないであらうが、實際に現れる愛の働きの上に於ては、親子は親子として、夫婦は夫婦として、兄弟は兄弟としての、特別のものを與へ合ひ、貰ひ合つて行くのでよいのであるまいか。

拜む心こそ

他の人から後ろ姿を拜まれるやうな人間になれと云ふ教訓を聞いた事がある。この教訓に従はうと思つたら、自分が他人の後ろ姿を拜むがよい。拜まれる人は、自分から先づ拜んで居る人である。拜む心こそ拜まれる程の尊さを具へた心である。

「我」が碎けて

拜むと云ふ事は拜まうと思つた位の事で拜めるものではない。拜まずに居られないやうになつて来て、拜ませられるのである。先方が徳の高い人であつて、その徳がこちらへ迫つて来て、こちらの「我」を溶かして了うて呉れた時に、われ知らず拜まずに居られないやうにならされるのである。

しかしそれは先方の徳が、こちらの「我」を碎き切る位に高い時に限られるのであつて、先方がそれ程の人でない時には拜む心は起つて來ないのである。所がこゝにもう一つ拜むやうにならされる場合がある。それは教の光に照らされて、自分の正體が明らかになり、それが「我」の塊りである事を知らされる所から、自分の「我」が碎け切り溶け去つて了つた時である。その時には先方がどうであらうと、かうであらうと、それには關係なく、こちらの頭が下がつて了ふのであるから、誰れをも彼れをも拜む事に自然になるのである。この拜み方は先方の徳

のどうかうに關らないのであるから、いつ如何なる場合でも變る事のない拜み方であつて、これが本當の拜むと云ふものであるであらう。

空　　つ　　ぼ

これで私はもう何も書く事が無くなつて了つた氣がする。苟も書いて讀んで貰ふと云ふからには、どこかに私らしいところが出て居り、何等かの味ひと云ふか、ねうちと云ふか、私にでなければ無いところの特殊なものがあると思へるのでなければ、どうにも書く氣になれないのである。心に浮んで來る事はあれやこれや無いわけではないが、いざ取り上げて書いて見ようとすると、特殊性がなく、私のものであつて、他の誰れ人のもないと云ふところが無くて、書く氣になれないのが多い。

かうして書くべきものは書いて了ひ、見て貰ふものは皆見て貰ふと、もう私と云ふものは何物でもないものになつて了ひ、云はゞ空つぼになつて了ひ、誠にさつぱりとしたものである。

どこでいつどうなつても少しも差支ない氣がする。

同　　じ　　事

生前に何も彼も皆發表して了ふと、死んだ後で出すものが無くなるから、あまり何も彼も出して了ふのは考へものであらう、大切なものを少しは残して置くやうにせよと云ふ忠告を受けたと云つて居られた人がある。私などもそんな氣がしなくてもないが、考へて見れば、そんな事を思ふのも、一つの野心であらう。死んだ後に人から重んぜられ度いと云ふ氣があるから、そんな事をも考へるのであらう。死んでから發表してねうちのある位のもの生きて居る間に、出しても、それだけの働きはするであらうし、死んだ後に出さなければ、さほどの力を現さないやうなものは、死んでから出して見たところで、さうたいした働きのあるものでないかも知れない。

ぼつりく

出すべきものは皆出してしひ、現はすべき事は凡て現はしてしひ、もう何んにも自分には無
いと云ふ事になつて了つてから、さてそれからの自分と云ふものは、どうなるのであらうか。
さうなつてから、そこに自分にぼつりくと現れ出て来るものこそ、自然の力に催されて生れ
出て来るものなのではあるまいか。

待 た う

何が生れるか。私を通して何が生れるか。待たう。

天地を通して

なんとしても先づ感ぜられるのは、天地を通して働き給ふ生命の力だ。生まんとし、生れん
とするもの。動かんとし、動かさんとするもの。

夫 れ 何 ぞ

思はうとせず、思はせられて思ふ。爲さうとせず、爲させられて爲す。われとして何んと爲
さんと思ふところもなく、思はんとする事もなし。一切皆空にして、充ちくたり。動かざれ
ども、亦静かならず。怡々として楽しむものは夫れ何ぞ。

生死の間に不二を

無より有へ。有より無へ。圓融無礙。暫くも些かも停滯あるべからず。無にも又有にも、滯るところ毫厘もあらば、無は内容なき空疎のものとなり、有は亂雜救ふべからざるものとなる。無は有に出で、生き、有は無に還りて調ふ。有無もと不二。別立すと思ふは非。同一とのみ執するも迷。無窮に相對して而して常に相即す。至玄至妙。これをこれ生死の間に味ふべきなり。

間の抜けたるが

空晴れたり、日あたゝか
われに許されたる時のあるあり

六甲山に登らんと思ふ
教へて呉れる人親切にして
安心してバスに乗り
よい氣持にて乗り居るうち
「何處へ」と車掌にきかれ
「六甲へ」と答ふれば
「とくに過ぎました」と云ふ
車は既に一廻りして
布引を走れるなり
顧みて笑ふわれ
間のぬけたるが面白し
電車にて尼ヶ崎へ向ふ
見上ぐれば六甲

かれも亦笑へり

登らざる六甲

父死して二年

われ歌なき日亦二年

登らざる六甲

われに復た

歌を興ふるか

生命の調子

歌は調子なり

生命の調子

リズムを取らねば

歌はならず

生命は

私は元來

歌のない男

それをさへ終に

歌はせるとは

生命は

本來歌が好きなのか

歌そのものでともあるのだらうか

私の歌

私は私の歌を歌はう
みづも歌ふと云ふではないか
松も歌ふ
水も歌ふ
風も歌ふ
私も歌ふ

母よ

母よ

母上よ
母君よ
私が母と呼ぶのが
あなたは嬉しいのでせう
長生きして下さい
私はあなたを喜ばせ度い

よ
い
母

眼に一丁字のない母
いろはのいの字も
書いた事のない母
それで居て四十餘年

父に感謝された母
なんと云ふよい母ぞ
私が母の子に生れた事を
私の子等よ喜んで呉れ

正 直

わが妻よ
おまへの正直は何と云ふ正直だ
馬鹿正直と云ふのでもなし
子供のやうな正直でもなし
神のやうな正直？
さあ

それはどうだか私も知らない
兎に角お前は正直だ
たうとう私をこれ位まで正直にさせた
ほかに取柄は一つもなくても
お前は私に感謝される

お父さんは

うちの私の子供等よ
お父さんはね
お前たちみんなを
それぐによいところがあると
思つて居るんだよ

云うて見るがよい

お父さんは出来るだけの事はして上げるからね
なんでも云うて見るがよい

着物が欲しければ着物を

本が欲しければ本を

樂器がいれば樂器を

學校へ行き度ければ學校を

出来るだけお前達を喜ばせ度いのがお父さんだよ
私に出来ない事は出来ないと言ふからね

その時はこらへてお呉れ

自 畫 像

自 畫 像

阿藤秀一郎さんに私の顔を描いて貰はうとしたら、特徴が無くてなかく描き難いらしい。自分でも平凡な顔だと思ふ。尤も大分前の事、畫心のある人が寫眞屋で私の顔を見て眼が氣に入つたとか云つて、わざわざ實物を見に來た事もあつたが。

風采の上らない事、これは又格別であるらしい。講演などに行く時、始めての所であると連れの人と間違へられる事が度々ある。私が立つて話をして居るのに、本人とは思はず、誰れかが前に話して居るのだと思つて居つたと云はれる事も時々ある。服装でも今少ししやんとしたかどうかと注意して呉れる人もあるが、持つて生れた持ち前なのであらう。何時までも同じ事ばかり云はれて居る。

服装などは自分の好みで着物はかう、羽織はかう、帽子はかうと撰定してこそ、自分らしい風菜も出来上るのであらうものを、私にはそれが一つも出来ないのだ。元來趣味も無いのであるが、今では他からの貰ひ物を次々に身につけて行くだけのやうな事になつて居るのだから、猶更まとまつた事になる筈がないのだ。

尤もそんなわけだから案外私自身でやるよりも、よく出来て居るところもあるかも知れない。現にこの間も廣島で私の着物が似合はないと云つて、自分のを持つて来て取りかへて着せて呉れた。東京では鞆が小さ過ぎると云つて、大きいのを呉れた。今身につけて居るのを考へて見ても皆貰ひ物だ。帽子は昨年十一月東京で無くして、古いのを貰つたのを、又廣島で交換して、それが今のである。外套は大阪で二三年前に貰つたもの、足袋は笠松で、ズボン下は丸龜で、帯は大阪で、羽織は因島で、萬年筆は笠岡で、下駄は尾道で、時計は父の遺品、鎖は廣島と尾道とで二本も貰つてつけて居たが、この間一郎に時計が出来たので、一本

貸してやつた。私が自分の好みで買ったものとは一品も無いのだ。

元來私は衣食住の事については餘り心を勞しないやうに出来て居るらしい。今住んで居る家にしても、父が生前に家内と相談して建て、呉れたもので、私は窓一つどこへどうつけるのかわらずに居る間に出来上つて了つた。出来上つて移つた後も、私の室と云ふものも定まつて居らず、鞆一つ持つては二階へ上つたり、椽先に出たりして、到る處で店をひろけて仕事をして居る。

仕事と云へば汽車の中で原稿を書く事もあるし、驛の待合室で手紙を書く事もある。時間があれば待合で居眠りをする事もある。私がそんな事をするのを知つて居る人は、よく人ごみの中でそんな事が出来るものだと言はれるが、出来るものにはなんでもない事なのだ。別に感心な事とも思はないが。

私には物の形とか姿とか云ふものに對する關心が餘り無いのであるらしい。都會へ出て何が流行なのか、どんな事が新しく出來始めたのか、そんな事がいつ迄も眼につかない。一度通つた所でも、行つた所でも、家の形でも室の工合でも、後までも覚えて居る事は少ない。我れ乍ら迂濶な事だと思ふ事もある。

それから私は無器用で仕方がない。小包一つしても満足な事は出來難い。子供の時分に鳥籠を一つ拵へた事があり、少し大きくなつて鍋すけと水瓶の蓋を拵へた事があるが、それは「正雄は無器用で何もよう拵へない」と云ふ家庭の通り相場に對し、一種の反抗心からやつて見たのであるが、結果に於ては一層みんなの云ふ事が本當である事を確めた事になつて了つた。

尋常小學校から高等小學校へ行くやうになつた時、つらかつた事が一つあつた。それは學科の中に唱歌と繪とが増える事であつた。唱歌は調子はづれであるし、繪は犬の子も描けないのだ。それ等の得點が悪いので、成績がいつも出ないのをどうする事も出來なかつた。

私の右の手は發達が不充分なのだ。冬が來るとかじかんで使ひ難い事夥しい。平生でも弱い。始めは箸を左の手に持つて食べて居り、筆も左に持つて居つたさうであるが、兩親や先生が喧しく云つて右に持つやうにして呉れたのださうである。左でそのまゝ書くやうになつて居つたら、字なども今少しよく書けるかも知れない。

音樂とか繪とか踊りとか云ふものは好きなのではある。よくはわからないのだが、絶えず憧れはある。しかしさう云ふ事がわかり、さう云ふ事が出來る線が、一本足りないやうな氣がする。

それが爲めでもあらう。人間に氣品がない。俗の俗なるものである。字にもそれが現れるし、一舉一動にそれが現れる事が自分にもわかる。元來情よりも智の方が働くので、打算的であり、功利的である爲めに、下品になるのであらう。

近頃私に會ふと清い感じがするとか、濇い感じがするとか、なつかしいとか何とか云はれる

人があるが、どう云ふ所からそんな事になるのか、私にはわからない。

氣安にはなつた。どこへ行つても氣安い。それは人を悪く思はないやうになつたからであると思ふ。人に會つて氣がおけない。私に別に野心が無くなつたところから、人を怖れる事が無いやうになつたからであらうかと思ふ。

吾家へ歸ると吾家の者が喜んで呉れ、他家へ行くとその人が喜んで呉れる。何故そんなに私を喜んで呉れるのかと聞いて見たら、あなたが居るとそこが賑やかになると云ふ。どこでも同じやうな聲を聞くので私も考へて見た。前にはさうではなかつたのに、この頃はどうしてそんな事になつたのであらうかと。

それは何も他に別にわけはないやうである。只私が心の底からみんなを悪く思はないやうになつたからであるらしい。他の人の悪い所が見えないのではない。それは前よりもよく見える

やうな氣がする。見えても悪く思はない。そこが前と異つて來た事を私も感じる。

それで皆んなが私を悪く思はないのだと思ふ。幾ら私と交つても、悪い感じを受ける事が無いのだと思ふ。それが次第にわかつて來るものだから、私は次第にみんなに好かれるのであるらしい。

どうして人が悪く思へないのかと聞く人がある。私は考へて見る。それは私自身の悪い事がよくわかつたからである。人の悪いところが見えても、それと同じやうな悪さが自分にある事が先に知れて居るから、その人の悪さに同情する氣になり、責める氣はしない。自分の悪さを思つて居ると、あまり人の悪い所を探さうと云ふ氣もしなくなる。

自分の悪さがわかつて居るものだから、どんな扱ひをせられても不平が無い。又少しの待遇を受けても難有いと思ふ。その上自分の悪い所を常に恥ぢて居るから、他の人のよい所を尊敬

し、それを習はうと云ふ氣がある。さう云ふ氣持で居るものだから、どこへ行つても嫌はれる事が無いのだと思ふ。吾家へ歸つても、その氣だから、私が吾家に居ても、あつかましいものがのさばつて居る氣がみんなにしないのだと思ふ。

事實私は吾家の人々にでも、みんなよくして呉れる、濟まない事だと云ふ氣がして居る。私のお禮の足りない事、盡し方の足りない事が濟まない氣がして居る。どうして上げたらいいかなあと思ふ氣がある。どれ程の事も出来はしないのだが。

お前が好きだとか、お前が傍に居ると氣持がよいとか云はれても、私は長い事本氣にしなかつた。自分の嫌な性格にあきくし、唾棄し度いやうな自分にあいそをつかし切つて居たのであるから、そんな事を他から云はれても、お世辭だとしか思はれなかつたのである。

所があちらでもこちらでも同じやうな事を云はれ、幾年経つても、ますますさう云はれるば

かりなので、私もだんく本氣にどうしてさうなつたのかを考へて見るやうになつた。そしてそのわけが前に書いたやうな所にあるのだと云ふ事がわかつたのである。

此頃では私は随分思ひ切つた自己讚美の聲を上げる事がある。壇上から多勢の前で、

「私はこの頃時々吾家で鏡の前に坐つて、自分の頭をさする事があるのです。吾家のものが何をして居るのですかと聞きますから

「自分をさすつて居るのよ。」

「何故？」

「良いからさすつてやるのよ。」

「自分で自分を良いなど、自慢をすると人が笑ひますよ。」

「自慢ではないよ。自分で拵へたものを賞めるのなら自慢だが、私は自分で自身を拵へたのではないよ。憚りながら手製ではないぞ。拵へて貰うんだ。貰ひ物を賞めるのが何が自慢だ。私は自分を賞めく、拵へて下さつた兩親に禮を云つて居るのだ。」

そんな事を云つてみんなと大笑ひして居る時の私は、われ乍ら他愛もないもので、幸福そのものであると云つてよからう。

こんな事を云つて笑ふ事もある。

「私は生れた時二日も泣かなかつたさうです。それで祖父さんが心配して教會へ參つて「どうぞ泣きますやうに」とお願ひしたさうです。私はそれを聞いて前にはなんとも思はなかつたのですが、この頃はさう云ふのです。二日してから私は泣いたのではないのです。つらい事は一つも無かつたのですから、泣くわけがありません。泣きくこの人生を始めるやうな事で、長い一生がどうなりませうぞ。西も東も知らず、一二三の數さへ知らないで、無一物の眞つ裸で見ず知らずのこの世へ出るのに、泣きく出て来るやうな意氣地の無い事でどうなりませう。金の世の中と云ふこの世へ出て来るのに、一文の資本も持たず、道具一つ持たないで、景氣がよいか悪いかも調べもせず、暑いやら寒いやら尋ねもしないで、兎に角出ると云つて飛び出して来る元氣を思つて見て下さい。泣くやうな事でそんな元氣が出ますかい。」

だからこれからはお互に子供が生れた時に泣いたくとは云はない事にしませう。聲を上げたと云ふのが當らず障らずで一番よいでせう。私など生れた時に二日も何も云はなかつたのは、どう云つたものかと考へて居たのかも知れませんが、若し自由にものが云はれたら、「出たぞ」やるぞ」とでも云つたかも知れません。

私は今ではこの自身一つ有りさへすれば充分なのです。これ一つでどこまでもやつて行ける。金でも地位でも無いがよいと云ふ事はありませんが、無ければならぬとは思はないのです。この私一つを拵へて貰つただけで十分なのです。前には私は口には出して申しませんでした。が、心の中ではこんな自分を頼みもしないのに産んで呉れて困るではないかと不足に思つて居つたのですが、この頃はそんな事は思はないのです。頼まないのに、よいのを産んで下さいました。誂へぬのに特別製ですわいなと云ふのです。私がさう云つて喜ぶものですから、母も大層喜んで「私のやうなものに、ようもお前のやうな良い子が出来た事だ」と云つて居ります。何も無くてもそれで親も子も仕合せなのです」

こんな有様で私の自己禮讃も餘程行くべき所まで行つて居る氣がする。

いろ／＼な噂さが傳はつて來るのを集めて見ると、私に就て随分よい評判も可成り立つて居ると共に、随分ひどい批評も行はれて居るらしい。よい評判を聞くと嬉しい氣がし、元氣になるのだが、悪い噂さを聞くとド、キリとこたへる。併し私が自分に就ての評判を考へて見ると、よい方のはどうも自分の實際に當らないのが多く、悪い方のは私のありのまゝを突いて居る事が多いやうに思はれる。良い評判を聞いた時には、大抵の場合私にはどうしてそんなによく云はれるのか知らんと云ふ氣がするし、悪く云はれる時には、そんなに云はれるだけの事が私に十分あると云ふ氣がする。それで私は大變らくなのであるが、實際には果してどうなのか知らん。

私は評判倒れになつてはならない。評判の良いものに多く淺薄で、通俗受けのするものが多い。その上評判は人の心を甘くする。深くしつかりした所へ行くには、評判など立てられない方がよい。と云つて立てられるのをどうするわけにも行かないから、それにひつ掛らないやう

にする事が大切である。

私は今では本を読む事も少なく、教を受け度いと思ふ人に接する事も少ない。これでは進む事も深くなる事も出來よう筈がない。こんな事で私の將來はどうなるのであらうか。

私はこれ迄どんな事でも自分に出來るだけの事はさせて貰はうと思つてやつて來た。私に願ふと云ふものがあるとすれば、これがその一つである。何かの仕事を頼まれると、どうしてもそれをさせて貰ひ度いと云ふ氣が心の底から動いて來て、どうする事も出來ないのである。時にはそれをして行く事は自分には困る事だと思ふ事もあるのだが、それで居て矢張り心の底の方から、それをせずに居られない氣が動いて來るのである。今日迄の私はその氣に動かされてやつて來ただけと云つてもよいのである。

始めは私に出來る事があつたら何かさせて下さい。お邪魔になるかも知れませんが、こらへ

られたらこらへて、私にさせて下さい。私は何かさせて貰ふ事によつての外は助からないので
すから、さうして行くより外に私の生きる道はないのですから、私をどうぞさうさせて助けて
下さいと云つて、頼んで少しづつさせて貰うて居たのであつた。掃除や、按摩や、荷運びなど。

その私の願ひがだん／＼聞き届けられて、今では次から次へと仕事を恵まれて来た。殆んど
自分の勝手な時間と云ふものは少しもない位になつて来た。時間割通りに動く事になつて、時
時云つて笑ふのであるが、全く荷物が汽車で運ばれるやうなもので、何時の汽車でどこへ行き、
何々の事をして何時の船で又どこへ行き、そこで何々の事をさせて貰ふと云ふ事が、きちんと
定まつて了つて居る。そして前の所からは送つて来て呉れられ、切符を買つて呉れられ、辨當
を入れて呉れられ、そして後の所へ着くと、ちゃんと迎へに来て居て呉れられ、連れて行かれ、
食事も入浴も睡眠もちゃんとさせて呉れられる。

時には散髪までも私がしようとしなのに、床屋さんと呼んで来て、今の時間に散髪して貰

へと云はれる。最近幾度か續けてさうなつて居る。さうなると髪をつみ方も私は自分でどうし
ようと云ふ氣もなくなる。この間もどんなにしようかと床屋さんに云はれて返事に困つた。前
のやうにと云つて見たが、長い事つまないのだから、前の形は分らないと云ふ。傍で見てる
人々がどうかうと云つてよいかげんにして呉れられた。

自分で考へて見ても私には自身の生活と云ふものは無いのであらうかと思ふ。時々そんな工
合では何んの樂みもありますまいと云はれる事がある。さう云ふ點——何を着ようか、何を食
べようか、何をしようかと云ふやうな事には、私は別にこれと云ふ興味もないやうになつて居
る。

しかし私にも生活の味ひはある。前に書いた帽子にしても下駄にしても、鞆にしても帯にし
ても、私はそれ等のものに盡きない味ひを感じてなつかしがつて居るのである。それはそのも
のゝ形や色のどうかうではない。その物が私の所へやつて来た因縁を味ふのである。現にかう

して書いて居るこの萬年筆にしても、これを私に呉れた人の心持が、いつもこの中にもつて居て、それが私に限りのない喜びを與へて呉れるのである。

今の鞆を東京から貰つて歸つた時など、少しの間も自分の傍を離し度くなくて、夜寝る時は枕許へ置いて寝た。子供が下駄や玩具を貰つて、枕許へ置いて寝るやうなものである。

下駄でも傘でも皆それを呉れた人のよい心持、美しい心持、尊い心持、純な心持が、その物にもつて居る氣がして、下駄を履いて居ても、足の方から、何か知らよい心持が、こみ上げて来るやうな氣がするのである。

金でも品物でも私はだん／＼餘計にさう云ふ難有いもの、清いもの、良い因縁のものを持たせられるやうになつて來た氣がする。

時間などもさうである。前には時間を持て餘したり、使ひそこねて後で悔やんだりして居た事が多かつたが、今ではそんなにして自分の時間と云ふものは少しもないのであるのに、一刻一刻が皆生きて喜んで呉れて居る氣がして、怠屈する事もなく、いら／＼する事もなく、云はば時間と誠に仲善くして暮らして行つて居るのである。

こんなに何も彼もが良い方へ／＼と轉廻して行くのが、次第々々に加速度に進んで行つて果てしもなく良くなつて行くやうな氣がする。私の自己讚美もそんな所から自然に出て來たやうに思はれる。

私は空想に酔うて居るのであらうか。自己陶醉に耽つて居るのであらうか。お人好しなのであらうか。お目出度いのであらうか。そんな所も無いではない。しかしそればかりでもない。

私は随分現實を見つめて居る所がある。なか／＼許さない所がある。自分をも他人をも。

私は忘れて居ない所がある。ぎゅつとにらんで居る所がある。ある人々はあなたがちつとして居る時の眼は怖いと云ふ。すごい光があると云ふ。それはさうだらうと私も思ふ。私は私自身をも、ぎゅつとにらみすえて居る。私は腐らないだらうと思ふ。甘いばかりではないのだ。

顔は月並だが、私の生活の中身は私一人に獨特のものがある。見る事の出来る人が見て呉れたらわかる筈だと思ふ。その點では天下一品であるかも知れない。しかし案外又みんながさうなのかも知れないと思ふ。私は藝術家仲間知り合ひが少ない。さう云ふ中に私がかつて居るやうなところがわかり、私が營んで居るやうな生活をもつと豊かに細かに味うて居る人があるかも知れないと思ふ。

口で何を云つたとて駄目だ。筆で何を書いたつて何んにもなりはしない。どんな事をしたとて、しないとて、それもない事ではない。本當に自分の生きて行き、味うて居る中身は動かす事の出来ないものであつて、どうしてもかうしても働いて行き動いて行く。人にわかるか

どうかは末の末だ。實際に有るものはおほらかに誰れにでも感ずるものには相違ないらしいが。

兎に角私も大分自信が出来て来た。こんなにしてだん／＼に私は調子が整うて来て居ると、仕舞にはどんな働きが出来るやうになるかも知れない。そんな事を思ふ事もある。私と云ふものが、天地の動きと一つに動き、天地の調子と一つ調子になる事が出来ると、心持は筋立つて来、口から出る事ははつきりとして来、それが他の人の心持を整理し、事情を解決するやうになり、私もよい生き方が出来、他の人々をも本當に生かす事が出来るやうになりさうである。

これは私が自分に甘くなつたからであらうか。それとも本當に私がよくなつたからであらうか。甲だとも云へ、乙だとも云へ、又どちらでもあるとも云へるかも知れない。只なんとなく調子が整うて来た氣がする事は事實である。しかし調子に乗つてはならない。自惚れてはいけない。

私は生れた時、よく地方へ廻つて来て居た巡禮僧が、二三町離れた母の里まで来て、前日私の生れた事を聞き、「それはよい子が生れた、一つ行つて見よう」と云つて私を見に来たさうであるが、大層賞めて、よい子が生れたが、しかしこの子はこの土地には居らぬ。東京へ出ると云つたさうだ。

この話をよく祖父や両親はして、後に私が東京の學校へ行くやうになつた時、よく當つたと云つて母などは不思議がつて居たが、私は別に氣にもとめず、その旅僧がどんな人物であつたのか、一度でも東京へ出る事を大變な事のやうに云ふやうな人物であつたとしたら、よい子だと云つたところで、それは自分の低い量見でさう云うて居るのに過ぎないのでつまらない事だと思つて居た。

それは今でもさう思つて居るのだが、しかし私がかうならされて見ると、その僧はどう云ふ

積りでそんな事を云つたのか、今生きて居つたら聞いて見度い氣がしないでもない。

私は自分の將來はよいに定まつて居ると今は思つて居る。易を立て、貰ふ事もいらぬし、人相を見て貰ふ事もいらぬ。悪くなる筈のない道を私は進ませられて居るのだから、年月が經つて従つて私はよいものになつて行くに相違ないのだ。

しかし生れた時からそんな事を云つて居つた者があるとすれば、その者には私も少し甘へて見度い氣持がしないでもないのだ。

そんな事を云つて私は自分一人を特別なものにし度くはないのだ。それは私の嫌ふ所だ。何んでもない事だが、よく他所へ行くと、私にだけ大きな座蒲團を出されたりして居る事がある。時にはわざ／＼それを取りのけて他のを敷く程の事もない氣がして、その儘坐る事もあるが、私の氣持はみんなのと一緒のが落ちつく。お膳などでも別に高いのを出されたりする事があ

る。それも少し工合がよくない。

さう云ふ形の上の事に一々こだはり度くもないが、心持の上には私は自分を特殊の地位に置く氣はない。自分を中心にして何ものをこしらへようとも思はない。他の人を自分に従はせるやうな事、他の人を自分の爲めに使ふやうな事、さう云ふ事はし度くないのである。

これは私にはどこ迄もさうであるらしく、家庭に於てもさうなつて居るやうである。私の好きなのは、家内でも子供等でも、みんなが各自自身の生き方をして呉れる事である。自分の心を殺してまでも私に従うたり、私の眞似をしたりして貰ひ度くはない。私は私の通りなものをこしらへようとは思はない。私は私流になつて行くが、他の人はその人流になつて欲しい。そしてお互にそれを尊重し合つて生きて行き度い。

何が美しいと云つて、その人がその人を十分に生かして生きて居るのを見る程美しいものは

ないと思ふ。

私は又自分がどんな場合にも損と云ふ事をしない人間であると思ふ。それは實際にさうであるものだから、私もさう思ひ出したので、始めからさう思つて居たわけではない。實際私は損をしない。尤も別に得をしようとも思はないのだが。

私は自分の知つて居るよい事をみんなに知らせて上げ度いとは切りに思ふ。私の知つて居るよい事と云ふのが、さうどこにもでもあるやうな、好い可減なものでもなく、全く人間としての上なく仕合せに生活して行く事の出来る道なのであつて、而もそれが一々具體的に明らかになつて居るのだから、誰れに教へて上げて、その人がこんなによい事がこの世にあつたのかと驚かれるに相違ない事なのである。私がそれ程よい事を知つて居るとは思はない人が大方であらう。

併しそれを教へて上げる事がどうしたら出来るものか。それには私も苦心して居る。何よりも一番に大切な事は、その人が私からそんなによい事を習はうと云ふ氣になる事が大切なのである。それが無いとどうする事も出来ない。それがあるとどうともしなくても、私に接近して居る間に、一々の事に當つて次第に分らせられて来るらしい。

それで私は今では成るだけみんなから信じられ度いと思つて居る。私の爲めにはではない。その仕事をして行く爲めにである。

その事が如何にこの人間の世の中で大切な事であるかと云ふ事を思ふ人は、私をみんながなるとだけ本氣に信ずるやうにして欲しい。私に限つた事はない。その事を知つて居る人であれば誰れでもよいのだが、私は私を推すより外はない。

今では私は大層らくになつた。例へば講演などする時でも、前のやうに今日は何を話さうか

と考へる事が要らない。何を話してもよい氣がする。何を云つても、そこに出るものは私のこのよいものであるのだ。そのものは私がどうしよう、かうしようと思へなくても、自然に私から出て働くのだ。

と云つて呑氣にして居る事は出来ない。呑氣にして居り度いとも思はない。どうぞと常に精進の心持が絶えない。それが私自身に一番氣に叶ふのである。さうして居る時が私の一番仕合せな時なのだ。

精進と云つてどう精進するのか。毎日のやうに講演をして歩き、いろくの人々の相談に乗り、かうして原稿を書いたり、手紙の返事を書いたりするだけ。どこをどう精進するのか。

講演などもいつも同じ一つの事ばかりを話すのだ。書く事にしても大抵同じ事ばかりだ。聴いて呉れる人も読んで呉れる人も、大凡そもう私の話す事書く事はわかつて居るであらう。

しかし矢張り聴いて呉れる人もあり、讀んで呉れる人もある。さう多くではないが續けてさうして呉れる人もある。さう多くの人に讀まれたり聴きに來られたりしないのは、寧ろ私の喜ぶ所である。人氣に乗つてはやり切れない。

同じ一つの事ではあるが、私は話すのも書くのも飽きはしない。私としてはどこかに成長があり、深まつて行く所もあり、細かに入つて行く事も出来る氣がして居る。接近して呉れる人の中になさう云つて呉れる人もある。同じ事ばかり十何年も話すと云ふ事が、中身に成長がなければ出来る事でないといつて呉れた人もある。さう云はれて見るとさうかと私も思ふ。

變つた事、新しい事、別な事を話さうとしたり、書かうとしたり、そんな事は私はし度くない。そんな事で人を動かさうとしたり、人に喜ばれようとする事は私は好まぬ。さう云ふ事をし出したら、私の心遣ひはいつもつまらぬ事に引掛るやうになるに相違ない。それが分り切

つて居る。その煩しさは思つただけでも嫌ひだ。

私と云ふものが一人の人間でしかない以上、思ふ事もする事も、さう變つた事があらう筈がない。私は私流に。これはどうする事も出来ない私自身に對する私の約束事である。よいもわるいもない事なのだ。

只私は私として成長はして行かなければならない。それは怠る事は出来ない。これ迄に到り得たところを土臺として、その上に伸びて行かなければならない。これ迄に味ひ得たところを、これからの養ひとして、行ける所まで進んで行かなければならない。

私がこゝまで進んで來たと云ふ事、進ませて貰つた事は、これは私に與へられた特權である。これを味ひ、これを基にして登れるだけ登つて行く事は、こゝ迄私を養ひ育て、呉れたものに對する私の義務でもあり、報恩でもある。そしてそれは私がして行くより他に誰れもして呉れ

る者がある筈がない。

私の今到り得て居る所はさ程のものではないけれども、しかし又さう何んでもないものではないのである。少くとも私に取つてはかけ替へのないものなのだ。それを語り、それを書き現はす事を、その時々になるだけ忠實にして行く事に依つて、私はその成長を計り度い。表現して行く事が生命の成長なのであるから。

私の話はわかり易いと云はれる。又面白いと云はれる。しかし只わかり易いだけ、只面白いだけのものであつたら、それはそれだけのものに過ぎない。私はそんな事に重きをおいては居ない。私の話がわかり易い話になるのは、私の生活がむづかしくないからである。生活そのものゝらくな有様を、私の言葉で話すのだから、むづかしい話になる筈がないのである。

又私の話が面白いのは、私の生活の氣分が面白味が出来て来たから、それが話の上に現れる

のである。私は話を面白い話にしようなどゝは考へないし、話が自然に面白い話になるのを避けようともしない。その邊の事は自然の成行に任せる。

只私は自身の生活を大切に始めて行く事に力を入れて行き度い。私の生活は平凡な生活であり、なんでもない生活をして居るのであるが、その中身を細かに味うて行き、それをそのまゝに報告する事にして行かうと思ふ。

一見平凡であり、なんでもない生活のありのままの報告談であつても、それが出来る限り細やかであり、行き届いて居れば、それは多くの人に取つて盡きせぬ味ひがあるものであるらしい。私の話にもそれがどこかに出て来るやうであり度い。それには私の生活がさうであるやうに進むのでなくてはならない。

私の話が面白いと云ふ事に就ては、時々こんなに云はれる事がある。「あなたの話は聴く人

をあまり笑はせ過ぎる。笑はせる事を今少し少くした方がよくはないか」と。成程さう云はれて見ると、時には始めから終りまで高笑ひに終始する事もある。時にはしんみりとして涙を浮べて聽いて呉れられる事もないではないが、どちらかと云へば笑うて聽かれる事の方が多いやうである。私にも少し笑ひを誘ふやうな調子がないでもない。さう云ふ點は氣をつけた方がよいのであらう。

笑ひと云へば私の笑ひ顔は時々問題にされる。全く役者のやうな話であるが、私の笑ひ顔が大變によいと云はれるのである。自分でこれは見る事が出来ないで、果してさうかどうか分らない。

見ると云へば時々私はこんな事も云はれる。あなたを見て居りさへすればよい。煩悶があつたり、問題があつたりしても、あなたを見ればもう何も聽かなくても解決すると云はれたりする。時には夢にあなたを見て問題が解けたと云はれる事もある。見て居て見飽きのしない人だ

と云つて呉れられた人もある。

私を見て居て自分の問題が解けたと云はれた一番始めは糸崎に於てであつた。何年か前の事であつたが、前夜から翌朝へかけて、私を只見てばかり居る人があるので、何んの爲めに見られるのかと聞いて見たら、酒が欲しくて仕方がないので、腹が立つのに困つて居るのだが、話は幾ら聞いてもその時はその氣になるのだが、直ぐ又後戻りして永續きがしない。それであなたを見て、あなたの中にあるよいものを自分のものにしなければ駄目だと云ふ氣になつて、かうして見て居るのだと云ふ事であつた。

私も面と向つてそんなに云はれるのは始めてであつたから、一寸面喰つたが、考へて見ると、それは私としては難有い事で、先方が見て下さつてわかつて呉れられるものであるなれば、私の方は話をする事も要らず、書く事も要らず、自分の好きな事をして居りさへすればよいのだから、これ程勝手のよい事はない。どうぞ御遠慮なく見て下さいと云つておいた。

その人は二三日私の行く所へ隨いて来て見られたが、たうとうその間に酒を以前のやうに澤山飲まなくてもよい事になり、腹もあまり立たないやうになつたと云つて喜ばれた事がある。

その人の云はれ方には面白い所がある。酒を咽喉を通らせるのが悪い事はありませんが、前のやうに飲まなければやりきれぬと云ふ事がなくなりましたと云はれるのである。それでこそ酒についての道を得られたものと云ふ事が出来ようと思ふ。

酒に限らず、何んでも趣味がわからないやうになつて了ふのが道ではないと思ふ。囚れないと云ふ事は、そのものゝ味ひ、ね、うちはますくよくわかるやうになる事ではなくてはなるまい。

そんなにして皆さんから見られたゞけでお役に立つやうになれば、私も大分よい事になつたものである。しかしそこには又實に危い所がある。私がそれに乗つたり、さう云ふね、うちが私

にあると定め込んだりしたら、危い事夥しい。見て得をすると思ふのは、見られる私にそれだけのね、うちがあると云ふよりも、見る先方にそれだけの眼力があるからに依る事が多いのである。よく見ればどんなものからでも、限りのない得をする事が出来るのである。

現に私もよく人を見る事に依つて大變に恵まれて居る。いろくの方が來られて、御自身を私に見せて呉れられる。私はよく見もし、又よく聴きもする。そしてその方の中の中までわかり度いと思ふ。よくわからなければ、その方にどうして上げたのが一番よいのか、わかる筈がない。

知り度い、わかり度いと思つて、ちつとよく見もし聴きもして居ると、だんくわかつて來る。わかると云ふ事は、不思議な事である。始めにはわかりさうに思はれないものが、ちつと見たり聴いたりして居ると、次第にわかつて來るのが不思議な事である。

人間には自分の事をわかつて欲しいと云ふ願ひがあるものらしい。どうして貰はれなくても、只わかつて貰へるだけで賑やかにもなり、強められもするものであるらしい。

私は只先方の云はれる事を聞かせて貰ふだけ、ちつとよく先方の姿を見せて貰はうとして行くだけで、私の方から別にどうして上げるのではないのに、大變に喜ばれる事が度々ある。

しかしこのちつと見て居ると云ふ事、聴くと云ふ事、これがなか／＼容易に出来る事ではない。餘程こちらに餘裕が出来て來、落ちつきが出来て來ないと出来難い事である。それを私はして行き度い。又だん／＼に出来るやうに思はれる。

ちつと見て行くと云ふ事、よく見ると云ふ事、それをして行くと、どう云ふ人からでも、私は大變に教を受ける事が出来る。人間の姿をだん／＼わからせられ、自分自身の姿をわからせられて來る。それがこの上ない仕合せである。

私を見て下さる事に依つて得る所があると云はれるのも、それと同じわけであらう。私はそれで思ふのである。私自身のありの儘の姿をなすだけその儘に現はして行き度い。そしてなすだけ皆さんの御役に立ち度いと思ふ。

しかし自分のありの儘の姿を現はし度いと私が思ったとて、この事は自分がさう思うた位で出来る事ではない。自身を取り繕うて人に見せ、飾つて見せる必要がある間は、どうしてもありの儘を出して行く事は出来るものではない。人からどうにかして欲しいと思ふ所があり、どう思うて貰ひ度いと思ふ所がある間は、どうしてもありの儘の姿を出して行く事は出来る筈がないのである。

それが私にはもう必要がない事になつて居るのである。何をどうしてこの私を守らなければならぬと云ふ必要がないのである。私は自分の計らひや力みでどうにかして自身を生かして

行かなければならないと云ふ事がない事になつて居るのである。

だから私はいつでもありの儘で居る事が出来るやうになつて居る。それで私もらくであるし、他から見て貰つても、見よいのであらう。今の私は自分の心持のありのままをそのまま現はす事が出来、別に飾る事も要らないし、拵へ事をする事も要らないのだから、他から見られてもよくわかつて、参考になる事もあるであらう。

それに多く人間が困るとか悩むとか云ふのは、自分のありの儘を打出してやつて行く事が出来ないところから起つて居る事が多いので、それが出来るやうになりさへすれば、苦みや悩みはばらばらと解けて了ふものであるらしい。

私のありの儘を現はしての生き方が、見て下さる方々になんともなくわかつて、それでその人のいろ／＼の問題が解ける所があるのであらう。

私は一二年前頃自分がもう行くべきところまで行きついて了つたやうな気がした事がある。もう別にしなければならぬ事も無くなつたやうな気がし、いつ死んでもよいやうな気がして、頻りに死の事を思うたりして居た。自分の前途にも、もう進む餘地が無くなつたやうに思はれたのである。

それが近頃は又そんな気がしない事になつた。別に何をしようと云ふ事があるのでもないのだが、鬼に角生き／＼と元氣に働く事が出来、自由の世界に一段と出られた気がして居る。

それで考へて見ると、一二年前に行き詰つたやうな気がしたのは、私の思ひと云ふものも、する事も、又私の周囲も十何年かの中に、いつの間にやら一定の形を取つて來た爲めに、その型の中に私が固まり込んだやうな事になつた爲めに、あのやうな気がしたのであらうと思ふ。

しかし元來私に何も私を中心にして造り上げようと云ふ氣がないのだし、そんな事になるのを好まないのだから、そんなになり掛けたのも、暫くの間の事で、又いつの間にやら溶けて了つて、私を縛る事もなく、閉ぢ込める事もないやうになつたのであらう。

今日に於ては私は復た一層自由な廣い世界に出た氣がして居る。そこにはもう別にどうと云ふ型もなく、筋もなく、どんなに私にならうが、私がどんな事を云はうが、どんな事をしようが、少しの差支もない事になつて來たやうである。

どんなにでもなれ、どんなにならうとも、よい事に於て變りはないよと云ふ氣が、今の私にはして居る。私自身に就ても、周圍に就ても。

だから話をする場合でも、前には私の腹の中に一定の筋があつて、それに外れないやうにと云ふ事があつたが、今は何んにもそんな事がない。その時の工合で何を話すかも知れない。何

をどんなに話してもよいのだ、どんな事を話してもよいに極つて居ると云ふ氣がして居る。

書く事も矢張りさうなつたものだから、今現にかうして書いて居る事にしても、こんなに次から次へと私の心に浮んで來る事を書いて居るのである。書く私も心おきなく書けるが、讀んで下さる方も氣らくであらうと思ふ。

昭和六年四月

五日印刷納本
八日第一刷發行

(150 芽)
定價金壹圓
(送料八割)



著者 岡山縣渡口郡金无町四八〇番地 高橋正雄
發行所 東京市外巢鴨町宮下一六八八番地 森本直次郎
印刷所 東京市牛込區原町二十五番地 野香由次郎
印刷者 東京市外下谷合町四丁目一五五七番地 溝口榮

發行所

東京市外
巢鴨宮下

篠山書房

振替東京三一七一三番

高橋正雄先生

月刊個人雜誌

生

天地の底から天地を貫いて生きる力、その力に生かされて生きる生活、感謝の生活、創造の生活は、先生の實生活に於いて味ひ得られる。

凡そ人生の救ひは、良き門をたゞくにある。身を以て覺者に觸れ、その生活を味ふより外に道はない。本誌は毎號、先生の尊き生活記録であつて、その深刻なる體驗に基く講演の筆記、鋭き觀察と徹底せる反省とより生れ出づる隨筆と詩、水の如き消き身邊の消息は、迷へる者には道を、病める者には慰安を、弱き者には力を、而して生きんとする者には、光と熱と濕氣とを至れり盡せりに與ふる福音である。眞摯に道を求むる人々が、全身を提けて、本誌を清讀されん事を切に乞うて止まない。

誌代
一ヶ月 貳拾錢 (郵稅共)
六ヶ月 壹圓貳拾錢 (郵稅共)
一ヶ年 貳圓四拾錢 (郵稅共)

東 東 座 口 替 振
京 東 三 一 七 一 三
香 三 一 七 一 三
房 書 山 篠
外 市 京 東
下 宮 鴨 巢

高橋正雄先生著書目録

道を求めて	定價 一、八〇	送料 一〇
私の願	一、八〇	一〇
素座談	一、二〇	八
對座談	一、二〇	八
ひとりの話	一、〇〇	八
生のよるごと	一、二〇	八
一筋のよるごと	一、二〇	八
神に語る	一、二〇	八
信者	一、〇〇	六
金光教祖と新生活	一、〇〇	六
ぬすみなき世界	三、三五	二
道にたいして	一、三〇	二
良いもの第二、三、四編	一、一五	二
を	各編 八	二
を	各編 八	二
吾を救へるものへ	各編 五	二
お	各編 五	二
お	各編 六	二
救われを救ふ	各編 五	二
聲。斷片語	各編 五	二

高橋茂久平先生著

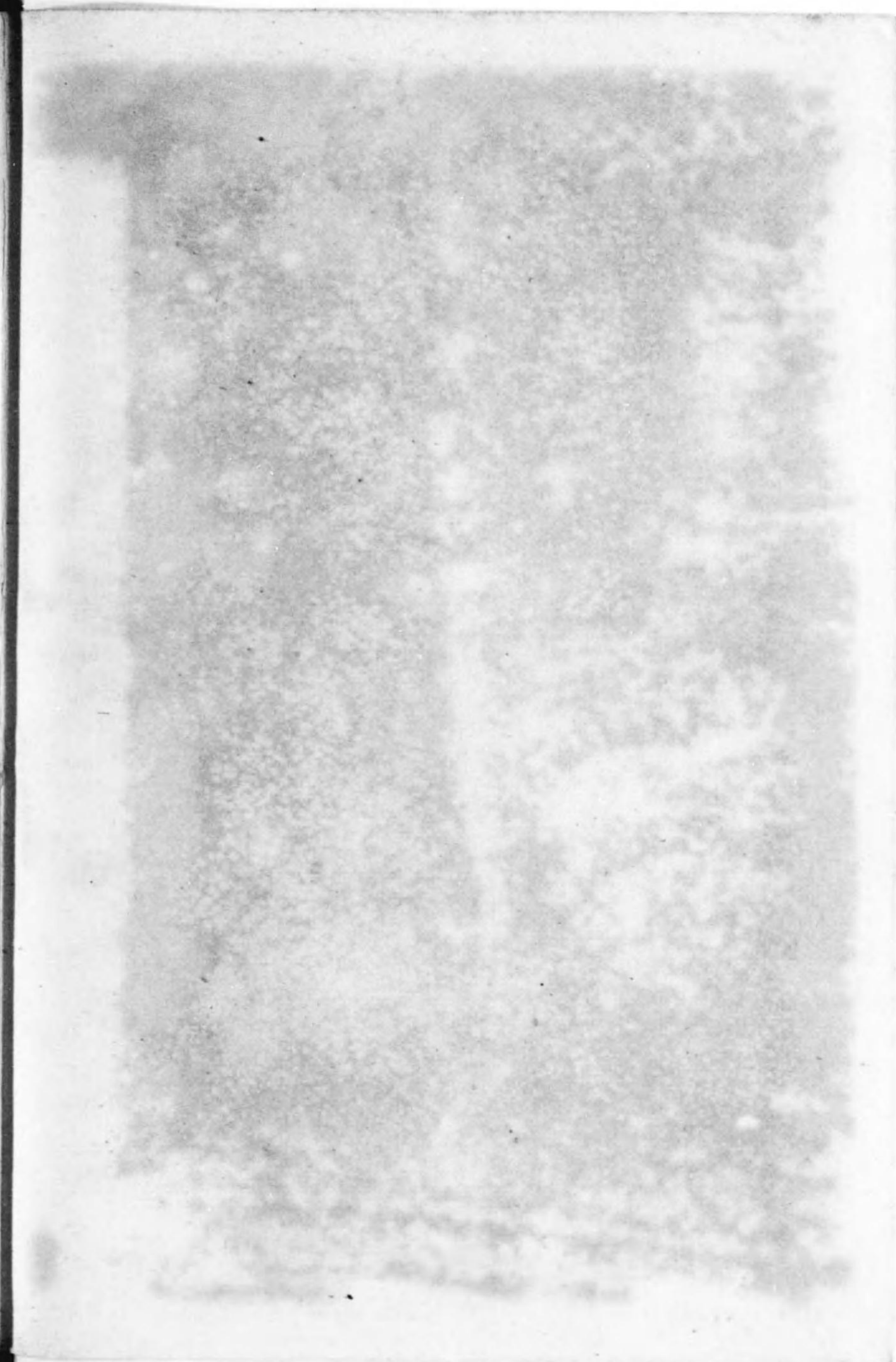
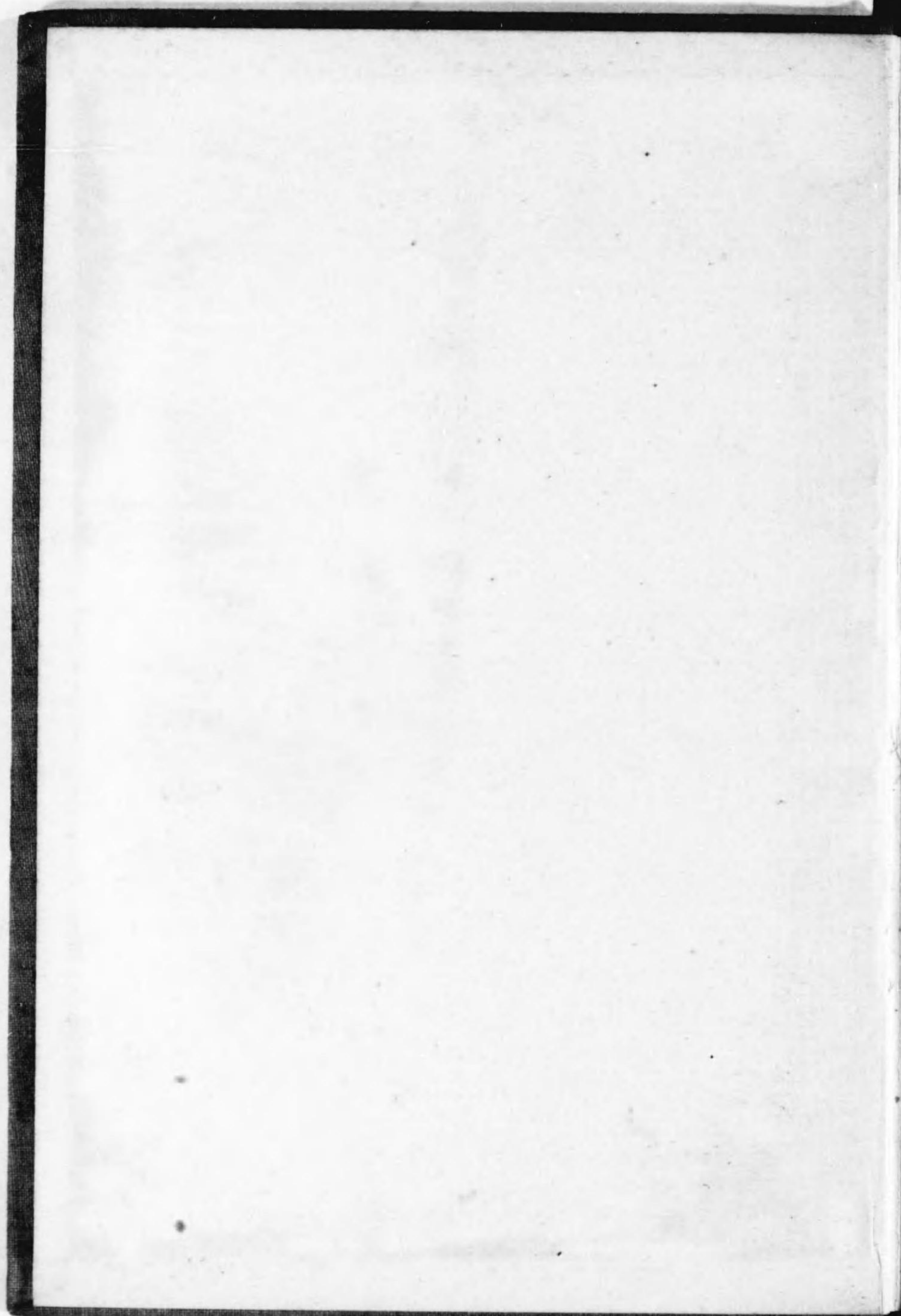
御理解感話

本書は「金光教祖御理解」全壹百節につき、金光教教義講究所に於て、高橋先生が勤行精進五十年の御信心より横説豎説、諄々として教へ語られたる尊き感話であつて、先生が六十有餘年の御體驗より、逐節生きたる事實をあげてその感話せらるゝ所、句々切實を極め、恰も眼前に教祖の神を拜する如く、又直々に教祖が金口より御理解を賜る如く感ぜらるゝのである。教祖御神上りましてより、竝に四十有五年、不思議にも未だ一冊にまとまれる註書なき折柄、誠に本書は金光教が多年仰望の書であつて、苟も御神縁を受けて本教にあるものゝ、咸く鑠骨銘肝すべき大文献であると共に、必ずや本教教義の普及確立上、一大力を致せる聖典の一として永遠に幾百千萬の教信徒が信念喚起上、その靈光を放つてあらうことを確く信じて疑はぬ。切に精讀を乞ふ。

菊版極上製函入

定價金參圓參拾錢

行刊房書山篋



終

